



第8図 明治35年敷根火薬製造所跡周辺地形図(1:50,000)(大日本帝國陸地測量部に1:50,000地形図『國分』改変)



第9図 昭和23年米軍撮影敷根火薬製造所跡周辺空中写真



第10図 敷根火薬製造所略図(『薩藩海軍史』引用)



第11図 敷根火薬製造所古写真(『薩藩海軍史』引用)

第4表 敷根火薬製造所に建造された建物一覧

明治6年 (JACAR:C09111656500)				明治10年 (JACAR:C09112599900)			
建物	棟数	面積	屋根	建物	棟数	面積	屋根
田代宿	1棟	15坪半	瓦葺	日記書	1棟	36坪半	瓦葺 戸障子及び根太板なし
職方休所	1棟	15坪	瓦葺	職人木小屋	1棟	19坪半	瓦葺 焼失
鋸工所	1棟	10坪	瓦葺	金物組工所	1棟	11坪	瓦葺 焼失
雜品格護庫	2棟	10坪2合	瓦葺	雜物庫	1棟	9坪	瓦葺 瓦少しほかり破損
		32坪半	瓦葺	雜物倉	1棟	39坪	瓦葺 焼失
柳木格護庫	1棟	16坪	瓦葺	柳木倉	2棟	10坪、48坪	瓦葺 焼失
硝石格護庫	1棟	5坪	瓦葺	硝石倉	1棟	30坪	瓦葺 焼失
火薬堅ノ所	1棟	6坪	小ヶラ葺	火薬堅所	1棟	6坪	小板葺
				旧火薬堅所	1棟	6坪	小ヶラ葺 焼失
				火薬堅め機械所	1棟	9坪	小ヶラ葺 焼失
火薬粒割所	1棟	10坪	小ヶラ葺	火薬粒割所	1棟	9坪	小ヶラ葺 焼失
				火薬粒割機械所	1棟	6坪	小ヶラ葺 焼失
火薬乾燥所	1棟	土間7坪半	小ヶラ葺				
火薬杵臼水車	3ヶ所 6棟	各6坪宛	小ヶラ葺	臼数30	火薬調合所	6棟	各6坪 小ヶラ葺 水車3幅、焼失
硫黄研石搗碎水車 左右2棟	1ヶ所 各4坪宛	瓦葺	臼数4つ		硝石水車	2棟	各6坪 瓦葺 2棟共崩壊
火薬庫	1棟	土倉15坪	瓦葺		硫黄碎小屋	1棟	4坪 瓦葺 水車1幅、焼失
火薬小出藏	1棟	板藏4坪	瓦葺		火薬庫	1棟	15坪 瓦葺 引戸破損
					火薬小出藏	1棟	4坪 瓦葺 壁板破損
木炭施所	1棟	15坪	瓦葺	木炭施所	1棟	43坪	瓦葺 焼失
				木炭火小屋	1棟	14坪	小板葺 調製所外の敷根村倉掛の勘右衛門屋敷にあり
木炭碎末所	1棟	8坪	瓦葺	硫黄精鍊所	1棟	16坪半	瓦葺
				門番所	1棟	4坪7合5勺	瓦葺
				銅治小屋	1棟	4坪	瓦葺
				占機械ポンプ所	1棟	4坪	瓦葺
				火薬仮藏	1棟	11坪2合5勺	小板葺 小板並びに壁板破損
瀝和桶機械所	1棟			瀝和桶機械所	1棟	77坪半	小ヶラ葺 水車1幅、焼失
				硫黄貯	1棟	6坪	瓦葺 焼失
				大工小屋	1棟	21坪	瓦葺 焼失
				薪小屋	1棟	12坪	瓦葺 焼失
				硝石製法所	1棟	72坪	瓦葺 焼失
				火薬搬占所	1棟	9坪	瓦葺 焼失
				合計	37棟	3170坪 (総面積)	
合計	22棟			合計			

## 第2節 調査の方法

### 1 発掘調査の方法

敷根火薬製造所跡の大半は現在水田となっている。そのため、今回の発掘調査は第13図に示す遺跡の範囲のうち、東側の耕作放棄地を調査対象とした。調査対象範囲には、現在も水田への用水路として使用されている凝灰岩製の切石で造られた水路や石垣等が残っていた。調査にあたっては、鹿児島市維新ふるさと館所蔵の『敷根火薬製造所絵図』や『薩藩海軍史』に掲載されている略図と写真と比較できるよう、まず、地形略測図の作成や露出している石垣や導水路の把握を行い、次に絵図等から導水路が埋没していると想定できる箇所やトルビン水車が設置されていたのではないかと推測した箇所等に、トレーナーを設定した。

地形略図の作成の方法は、下記のとおりである。まず、発掘調査範囲を中心に石垣の清掃や雑木等の伐採を行い、現存する施設を詳細に観察しやすいようにした。並行して、一等水準点「基準点名2487」より本遺跡までレベルの移動を行い、人工的な平坦面や現存する導水路等の位置を平板で記録し、その位置図を霧島市から提供された平成20年測図の「霧島市基本図」と重ね合わせ、略測図を作成した。

発掘調査の方法は、下記のとおりである。まず、設定したトレーナーの表土を重機により除去した後、人力による精査を行った。必要に応じてサブトレーナーを設定し、人力で先行して掘り下げを行い、遺構検出面と近代以降の造成土との判別を行った。判別できた近代以降の造成土の除去を重機で行い、その後、人力での発掘を始めた。遺物は、全て表土や近代以降の造成土中、遺構埋土中か

らの出土であったため、トレーナー及び層・遺構ごとに一括で取り上げた。調査終了後は、検出された遺構等重要な箇所等は土嚢で充填し、その後重機による埋め戻しを行った。

### 2 整理作業の方法

陶磁器や瓦の水洗い作業は、ブラシを用いて行った。

注記は、注記記号「シキネ」を頭に、続けて「トレーナー名」、「層・遺構名」、「遺物番号」の順に記入した。

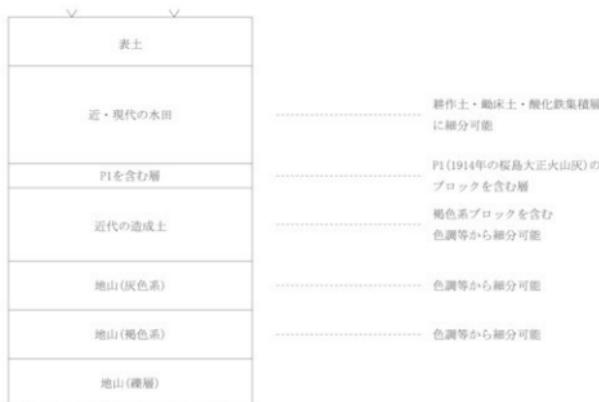
遺物の接合は、遺物の種類別に区分した後、接合を進めた。

### 3 第3節 層序

本遺跡の層序は、概ね第12図のとおりである。

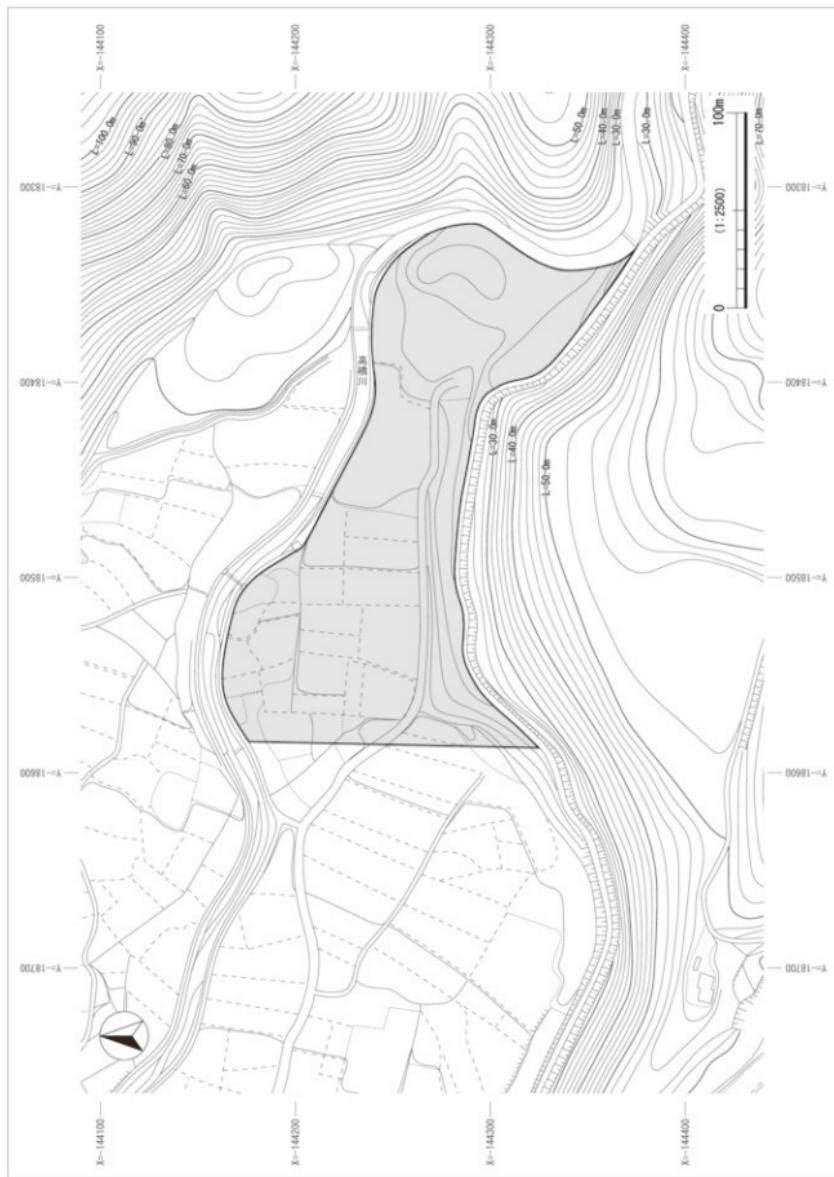
表土の下には近・現代の水田関連の層がある。その下層に、大正3（1914）年の桜島大正火山灰であるP1が堆積しているトレーナーも確認された。P1を含む層の下層には大正3（1914）年以前の近代の造成土がある。この造成土を除去した面が、敷根火薬製造所時の遺構検出面となる。さらに造成土の下層には地山である灰色系や褐色系の層があり、安山岩を主体とした礫層に至る。

詳細については、各トレーナー毎に図示する。



第12図 敷根火薬製造所跡基本層序柱状図

第13圖 敷根火薬製造所跡遺跡範圍圖(1/2,500)『福島市基本図』改変



## 第4節 調査の成果

### 1 現存する施設等について (第14~16図)

地形略測図を作成した結果、旧水田の区域と考えられる平坦面や現存する導水路等の位置を把握することができた(第17図)。また、調査前、樹木や雑草が生い茂り、現況がよく分からなかった導水路や石垣等の施設は、伐採を行った結果、詳細に観察できるようになった。以下、特徴的な施設について詳述していきたい。

第14図①は、現在も水田への用水路として使用される導水路への取水口である。現在はコンクリート製となっているが、昭和61(1986)年に川越重昌氏が実地調査を行った際の記録写真では、取水口付近に凝灰岩製の切石で造られた護岸が写っている(第14図②)。おそらく川越氏が調査後、水害等によりこの凝灰岩製の切石で造られた護岸が破壊され、現在のコンクリート製の護岸に変わったものと思われる。

この取水口から、取り入れられた水は、コンクリート製の導水路を経て、第14図③の落水口へ至る。導水路もこの落水口直前に敷根火薬製造所時の様子を留めている凝灰岩の切石製の導水路となる。この落水口石組の最高所へ水路底部の高さは約3.9mである。一部凝灰岩の岩盤をそのまま加工し、切石と組み合わせることで、落水口の石組みには「□」形とほぞ穴状の加工が対となってみられる(第14図⑤・⑥)。おそらく、この加工部分に棒を掛け、その上に水車に水を落とすための木樋を設置したのではないかと推測される。また、近くには「水神・山神・地神」と刻まれた石碑が設置されている(第14図⑦)が、記年銘はなく詳細な時期は不明である。なお、この落水口の両脇の平坦面を昭和63(1988)年、鹿児島県立国分高等学校郷土研究クラブが発掘調査を実施しており、水車に伴う建物の礎石や埋没した導水路等を検出している。さらにこの落水口から続く導水路は、西側へ続き、後述する6トレンチ付近で再びコンクリート製に切り替わる。なお、第15図⑨の地点の導水路がカバーする部分は、絵図でも描かれている。また、落水口から続く導水路の床面を、止水時に観察することができた。床面にも凝灰岩製の切石を用いており、一部、北側に構状の加工もみられた(第15図⑩)。この導水路にも、「○」形やほぞ穴状の加工が見られた。水路床面まで達するほぞ穴(第15図⑪)は、同じ加工のほぞ穴と対になっている。おそらく水量調整用の板をはめ込むための加工と思われる。水面まで達しないほぞ穴(第15図⑫)と「○」形の加工(第15図⑬)が対となっている。落水口の加工と同様、棒をはめ込むための加工と思われる。竈ノ上火薬製造所跡には昭和60年代、導水路の内部に棒を渡し、蓋を設置した状況が確認されている(第15図⑭)。本遺跡で確認された加工も同様の用途に用いるための加工ではないか

と推測される。

現在、水田への用水路と使用される導水路以外に、後述する3トレンチ付近で、一部埋没して現在は使用されていない導水路も確認された(第14図⑮・第15図⑯)。よって、絵図には発掘調査を実施した箇所に3本の導水路が描かれているが、現在地表上で確認できる導水路は2本ということになる。

石垣は、凝灰岩と安山岩で造られた石垣が多数現存している。しかし、凝灰岩の切石のみで造られた構築物は、前述の落水口の石組や現存する導水路以外は、第15図⑯の石垣等数が少ない。石垣を構成する石材の違いが何の差異によるものなのか、地表面の観察のみでは、分からなかった。第15図⑯の石垣は位置的に、絵図における敷根火薬製造所入口の石垣ではないかと推測される。

このほか、特徴的ないくつかの施設・地点について説明する。第16図⑰は、凝灰岩の切石等を円形に並べ構築した炭窓跡と思われる遺構である。当初、火薬の原料の一つである木炭の製造に関わる遺構の可能性を考えたが、地元住民により戦後構築されたものであることを確認した。第16図⑯は加久藤火砕流起因の溶結凝灰岩の露頭である。この凝灰岩は、敷根火薬製造所跡で使用されている凝灰岩の切石と同一石材である<sup>11)</sup>。このような露頭は、本遺跡内及び周辺で数か所確認できる。第16図⑯は戦後、米粉の製粉水車に使われていたとされる石組である。第16図⑯の放水口の床面には、セメント等で補修した痕跡も見られる。第16図⑯は敷根火薬製造所跡近くの山中にある石碑である。「肅神社・主夜神社」と刻まれた面と「明治八年乙亥七月 伊勢仲左衛門・鷲島善兵衛

河野新助・中馬口口」と刻まれた面がある。伊勢仲左衛門は、前述したとおり、敷根火薬製造所の見聞役である。また、現在石碑がある位置と絵図において敷根火薬製造所入口近くに描かれた鳥居の位置がほぼ同位置であることが指摘される。このほか、本遺跡から約500m程度北にある医師神社内の石塔(第16図⑰)にも、「明治八口 伊勢仲左衛門 河野新助」と刻まれている。二つの神社に、同時期に石碑・石塔が建立されていることから、先行研究では前年の明治7(1874)年に火薬製造に伴う事故があったことが指摘されている。

#### 【註釈】

1 鹿児島大学大木公彦名誉教授のご教示による。



第14図 敷根火薬製造所跡現況等細部写真① (②の写真はたいら郷土館蔵)



9



10



11



12



13



14

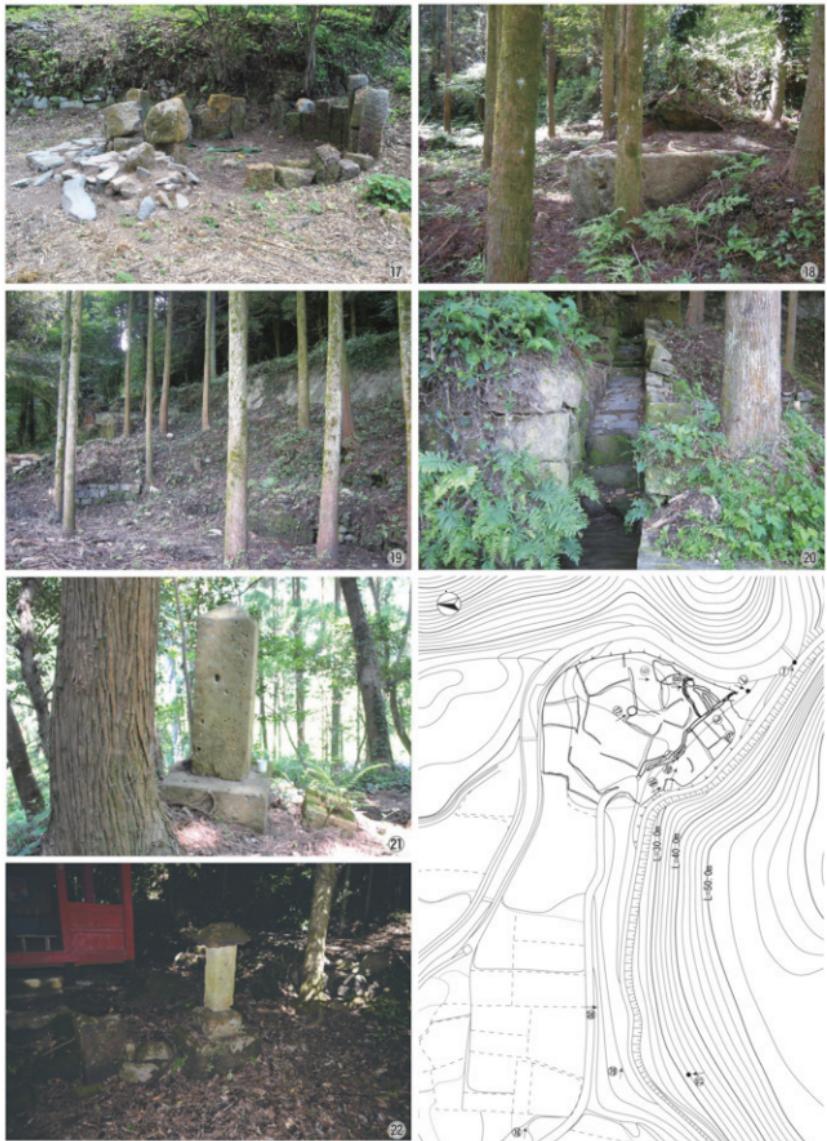


15



16

第15図 敷根火薬製造所跡現況等細部写真② (15の写真是たいら郷土館蔵)



## 2 各トレンチの成果について

第17図のように12か所のトレンチを設定して調査を行った結果、遺跡の残存状況や、埋没していた導水路等を把握することができた。以下、現存する落水口北側の調査（1トレンチ）、西側の導水路の調査（2～5トレンチ）、中央の導水路の調査（7・8・10～12トレンチ）、その他の地点の調査（6・9トレンチ）の目的毎に詳述していく。

### （1）現存する落水口北側の調査（1トレンチ）（第18図）

昭和63（1988）年、鹿児島県立国分高等学校郷土研究クラブが落水口の北西の平坦面に設定したN Sトレンチに直交する形で、水車に伴う建物礎石等の把握を目的とし、トレンチを設定した。現況は杉林となっている。調査の結果、国分高等学校郷土研究クラブが発掘した礎石や石垣の存在を再確認した。ただし、石垣の一部は国分高等学校郷土研究クラブ調査時より、崩壊が進んでいた。石垣は、東西方向に約7.5mの長さ検出されている。しかし、西側の石垣は現代の溝状造構により、最下段以外は削平されている。石材は、安山岩と凝灰岩で構成される。この石垣は、最大長1.3mの安山岩の礎石の

上に構築されている。仮にこの礎石が、敷根火薬製造所の施設の礎石であるとした場合、石垣は後世の石垣の可能性が高いと想定される。なお、1トレンチからはこの礎石以外の礎石と想定される礎は検出されなかつた。

トレンチ西側では、換白の下臼となる石臼が1点出土した。直径は約60cmである。石臼は、現状のまま現地に埋め戻している。

### （2）西側の導水路の調査（2～5トレンチ）

西側に一部現存する導水路の残存状況等を確認するため、トレンチを設定した。以下、標高の高い南側のトレンチから順に詳述する。

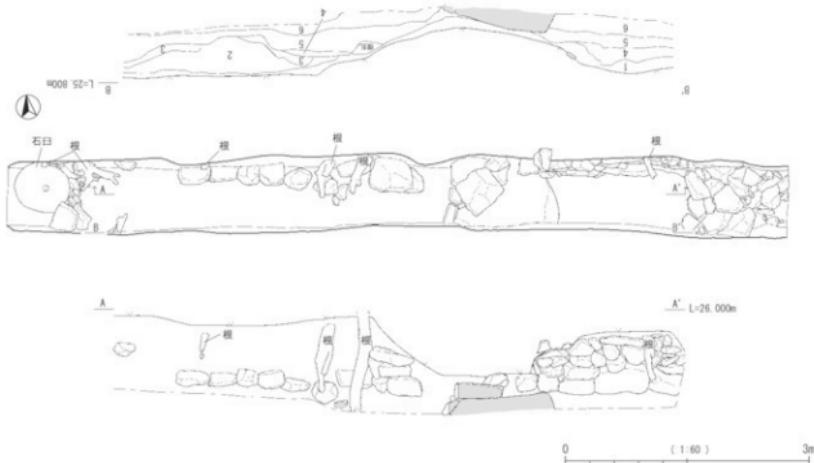
### ア 3トレンチ（第18・19図）

地表上で確認できる導水路部分を中心に、計7か所のトレンチを設定し、南側から北側へ3a～3gトレンチと呼称した。

**3 aトレンチ** 地表上で確認できている導水路の南側の平坦面にトレンチを設定した。現在この付近で導水路は確認できないが、昭和61（1988）年に川越氏が実踏調査した際には、導水路が残存していたようである。後述する3 bトレンチで検出された導水路床面のレベル付近ま



第17図 敷根火薬製造所跡トレンチ配置図



- 1 表土  
 2 黄褐色砂質土 (10YR5/6) しまりなし 粘性なし 現代の溝状遺構埋土  
 3 黒灰色砂質土 (2.5YR1/1) しまりなし 粘性なし 現代の溝状遺構埋土  
 4 黑褐色粘質土 (7.5YR2/2) しまりなし 粘性ややあり 近・現代の水田  
 稲作土
- 5 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) しまりややあり 粘性ややあり  
 近・現代の水田耕作層  
 6 黑灰色土 (10YR4/1) しまりあり 粘性ややあり 近代の造成土

第18図 敷根火薬製造所跡1トレーニチ実測図

で掘り下げ、調査を行ったが、導水路の痕跡は確認できなかった。おそらく、水害等に伴う護岸工事の際に壊滅した可能性が高い。

**3bトレーニチ** 3aトレーニチの北側、地表上で確認できている埋没している導水路から東側へ向けてトレーニチを設定した。調査の結果、埋没した導水路の側石に凝灰岩の切石を2段積み、床面にも同じ石材を使用していることが分かった。導水路の内幅は約50cm、床面のレベルは26.73mである。また、この導水路の東側では、幅約1.6mの硬面も検出している。

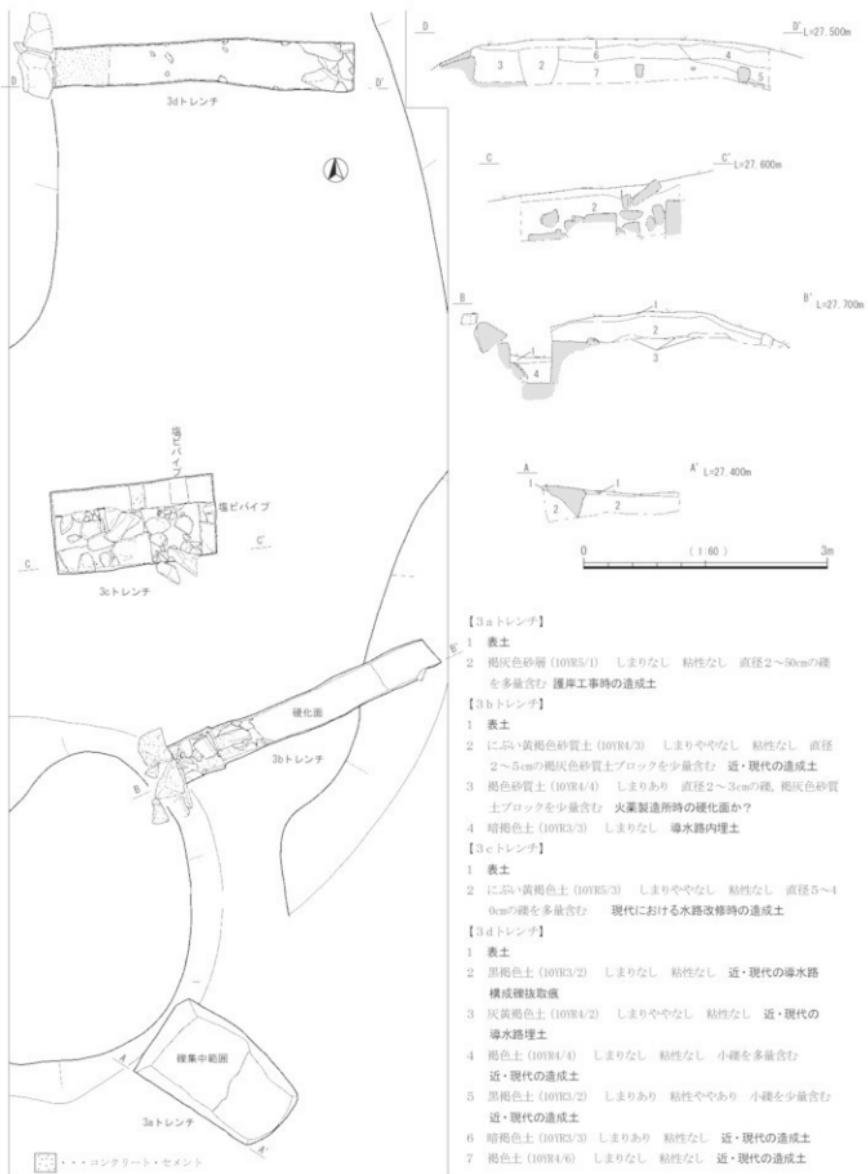
**3cトレーニチ** 3bトレーニチの北側にトレーニチを設定した。調査の結果、3bトレーニチで検出された導水路の続きを検出した。導水路の内幅は約50cm、床面まで掘り下げを行っていないため、床面のレベルは不明だが、少なくとも26.70mより低い。導水路埋没後は、塩ビ管を用いたものに変わったようである。塩ビ管の下端のレベルは27.22mである。

**3d～3gトレーニチ** 3cトレーニチの北側のトレーニチを設定した。いずれも凝灰岩や安山岩を用いた導水路跡を検出している。床面はセメントで補修されている。導水路跡は、3fトレーニチ付近で北側から東側へ向きを変

え、階段状の床面を有する3gトレーニチを経て、高橋川へ至る。床面のレベルは、3dトレーニチが26.90m、3eトレーニチが26.80m、3fトレーニチが26.65m、3gトレーニチは26.20m～25.70mである。3dトレーニチの床面のレベルが3bトレーニチの床面のレベルより高いため、3cトレーニチで検出された塩ビ管を通った水流導水路と想定される。つまり、3cトレーニチより北側で検出された導水路は、現代に改修されたものと判断できる。

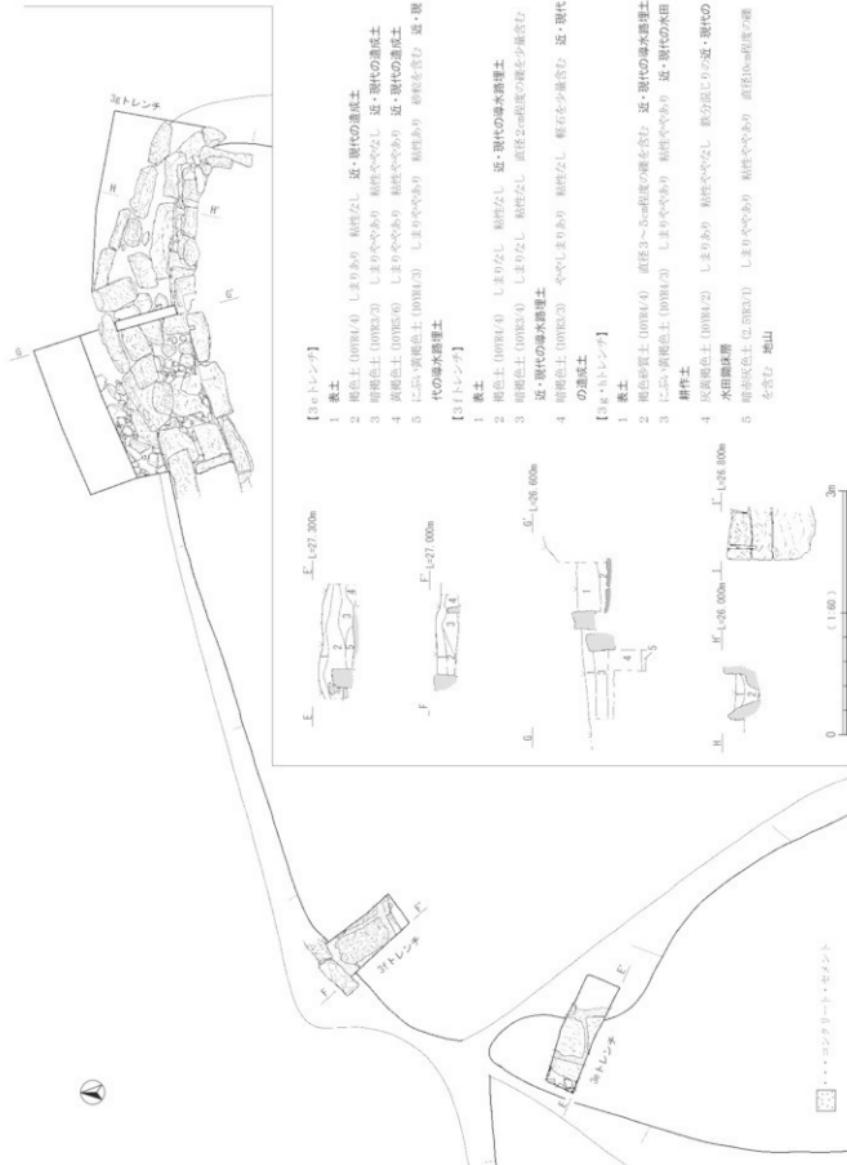
#### 4 5トレーニチ（第21図）

3トレーニチの北側、3トレーニチより1段低い平坦面に、3b・cトレーニチで検出した導水路の続きを探るためにトレーニチを設定した。表土及び近・現代の水田層を除去し、精査を行った。導水路跡は確認できなかつたが、幅1.7m～2.4mの縦が集中する範囲を確認した。この範囲にサブトレーニチを入れたところ、掘り込みの立ち上がりと思われるラインを確認した。よって、この集中範囲は、溝状構造である可能性が高い。断定はできないが、以前あった凝灰岩製の導水路を抜き取った痕跡を、溝状の遺構（縦集中範囲）として検出したのではないかと思われる。

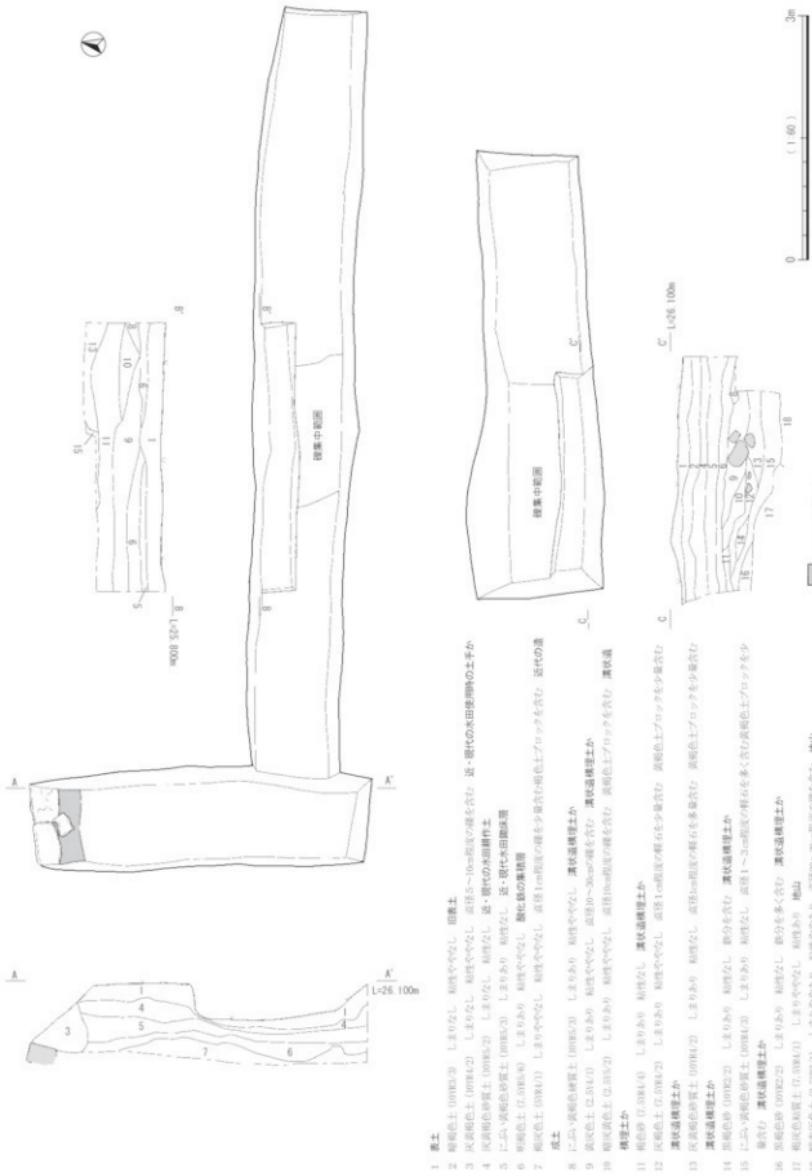


第19図 敷根火薬製造所跡3トレンチ実測図①

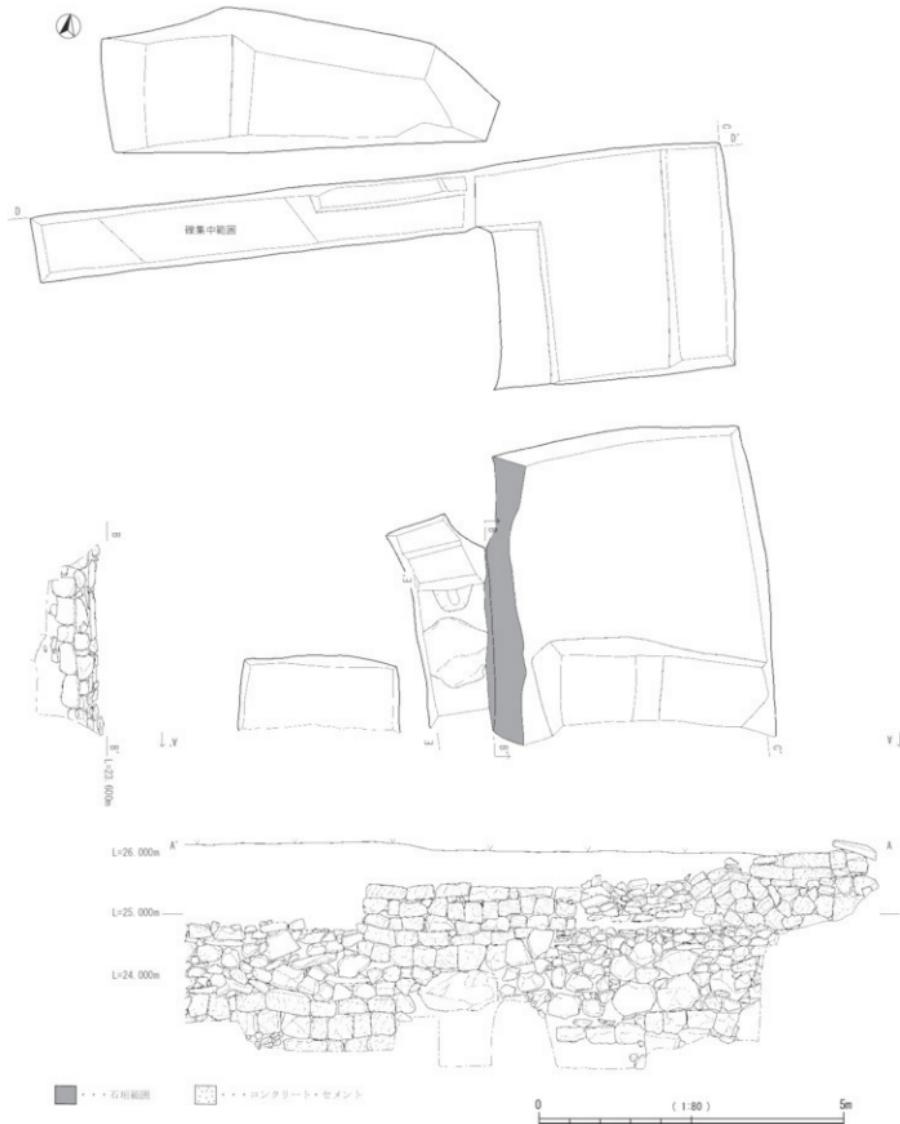
(A)



第20図 敷根火薬製造所跡3トレンチ実測図2



第21図 敷根火薬製造所跡5トレンチ実測図



第22図 敷根火薬製造所跡 4 トレンチ実測図①



#### 1 表土

- 2 灰褐色土 (7.SYR5/2) しまりなし 黏性なし 直径1cm程度の軽石を含む 黄色粒を含む 近・現代の水田使用時の土手か  
 3 褐灰色粘質土 (10YR6/1) しまりあり 黏性あり 近・現代の水田耕作土  
 4 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) しまりあり 黏性あり 近・現代の水田耕作層  
 5 赤褐色土 (2.SYR4/6) しまりあり 黏性ややなし 直径1cm程度の縫を少量含む 酸化鉄の集積層  
 6 灰褐色砂質土 (7.SYR5/2) しまりあり 黏性なし 灰色砂質土 (P1プロック) を含む層  
 7 褐灰色砂 (10YR4/1) しまりあり 黏性なし 直径1cmの縫を含む 近代の溝状道構造土  
 8 褐灰色砂質土 (7.SYR4/1) しまりあり 黏性なし 近代の溝状道構造土  
 9 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) しまりあり 黏性なし にぶい灰褐色砂ブロックを含む 近代の溝状道構造土

- 10 灰褐色粘質土 (7.SYR4/2) しまりあり 黏性ややあり 近代の造成土  
 11 暗褐色砂質土 (7.SYR4/3) しまりあり 黏性なし 近代造成後の流入土  
 12 暗褐色砂質土 (7.SYR4/1) しまりあり 黏性ややなし 近代造成後の流入土  
 13 暗褐色質土 (7.SYR4/6) しまりややあり 黏性なし 近代造成後の流入土  
 14 暗褐色粘質土 (7.SYR4/1) しまりあり 黏性なし 直径1cm程度の軽石を多く含む 近代の造成土  
 15 暗褐色粘質土 (10YR4/1) しまりあり 黏性ややあり 直径5~30cm程度の縫を少量含む 近代の造成土  
 16 暗赤褐色土 (SYR3/6) しまりあり 黏性なし 直径1~3cm程度の縫を多く含む 近代の造成土  
 17 灰褐色土 (7.SYR4/2) しまりややなし 黏性ややなし 直径1~10cm程度の縫を含む 近代の造成土  
 18 暗赤褐色土 (2.SYR3/1) しまりややあり 黏性ややあり 直径10~30cm程度の縫を含む 地山

第23図 敷根火薬製造所跡4 トレンチ実測図(2)

#### ウ 4 トレンチ (第22・23図)

5 トレンチの北側、5 トレンチより1段低い平坦面に、3 b・c トレンチで検出した導水路の続きや一部露出している石垣に落水口の痕跡がないか探るため、トレンチを設定した。

調査の結果、石垣の根石には凝灰岩の切石を積み、その上に安山岩の自然石を積んで石垣を構築していることが分かった。一部分ではさらにその上にも安山岩や凝灰岩の切石が積まれており、石材や積み方の違いから複数時期に渡って石垣が積まれたものと思われる。おそらく、導水路と同様に凝灰岩の切石のみで造られた石垣の根石を設定した。

部分でだけが、火薬製造所時の石垣ではないかと思われる。その他の地点でも、埋没した凝灰岩と安山岩で構成された石垣を検出したが、近・現代の水田に伴う石垣の可能性が高い。

4 トレンチ北西側では、縫集中範囲を確認した。検出しか行っていないため、性格は分からぬが、5 トレンチ同様、構造構造（凝灰岩製の導水路を抜き取った痕跡）の可能性が想定される。

なお、4 トレンチ付近は川越氏がトルビン水車を設置していた場所と想定しており、面的に調査を行ったが、その痕跡は確認できなかつた。

## エ 2トレンチ（第24・25図）

4トレンチの北側、4トレンチより1段低い平坦面に、3b・cトレンチで検出した導水路がないか探るために、トレンチを設定した。2トレンチ付近は、昭和1986年に川越氏が実踏調査を行った頃、養魚所があった（第26図）地点であるが、現在その痕跡を地表上で確認することはできない。

調査の結果、2トレンチ東側で養魚所跡のコンクリート製の水槽を検出した。また、トレンチ中央では安山岩で造った石垣を検出しているが、位置的に養魚所跡に設置された石垣と思われる。トレンチ西側では、礫集中範囲を確認した。検出しか行っていないため、性分は分からぬが、5トレンチ同様、溝状構造（凝灰岩製の導水路を抜き取った痕跡）の可能性がある。

### （3）中央の導水路の調査（7・8・10～12トレンチ）

絵図に描かれている調査対象範囲中央の導水路の残存状況等を確認するため、トレンチを設定した。現在、地表面上では導水路跡を確認できない。以下、標高の高い東側のトレンチから順に詳説する。

## ア 10トレンチ（第27図左）

1トレンチの北東側、現在地表面上で石垣が確認できる地点に、導水路がないか探るためにトレンチを設定した。

調査の結果、導水路やその痕跡を確認することはできなかった。また、地表面上で確認できた石垣は大正3（1914）年の桜島大正火山灰であるP1が堆積している層の上に構築されており、近・現代に造られた石垣であることが判明した。石垣は、凝灰岩と安山岩で構成される。

## イ 12トレンチ（第27図右）

10トレンチの西側、10トレンチと同じ平坦面に導水路がないか探るためにトレンチを設定した。

調査の結果、平面では分からなかったが、断面で導水路の抜き取りの跡と思われる溝状構造を確認した。幅は、検出面で2.0m、床面で0.6mである。床面のレベルは23.64mである。

なお、溝状構造理土中から瓦が出土している。

## ウ 11トレンチ（第28図）

12トレンチの西側、10・12トレンチより1段低い平坦面に、地表面上で確認できる石垣に接する形でトレンチを設定した。目的は導水路がないか探るためにある。

調査の結果、標高23.50m程度で凝灰岩製の導水路を検出した。導水路の内幅は約1.0mである。南北側は、石が抜き取れていっている。検出された導水路側石の南側では、凝灰岩の礫を含む裏込めも確認した。導水路の床面検出は行っていない。

また、地表面上で確認できた石垣やトレンチ北側で検出された石垣は、この導水路の上に構築されており、火

薬製造所廃止後に造られたものと判断できる。これらの石垣は、凝灰岩と安山岩で構成される。

なお、表土、近・現代の水田闊連層、近代の造成土中から瓦と陶器が出土している。

## エ 8トレンチ（第29・30図）

11トレンチの西側、11トレンチと同じ平坦面に、導水路がないか探るためにトレンチを設定した。

調査の結果、標高23.12m程度で凝灰岩製の導水路を検出した。導水路の内幅は約1.1mである。導水路東側にサブトレンチを設定し、埋土の掘り下げを行った。床面は、長さ65～70cm程度の凝灰岩の切石を組み合わせ、敷き詰めていることが確認できた。側石は2段積み上げている。導水路検出面から床面までの深さは68cmである。導水路埋土中には砂粒が堆積しており、水が流れていることが窺える。

また、トレンチ中央で石垣が検出されており、この石垣は導水路の上に構築されており、火薬製造所廃止後に造られたものと判断できる。石垣は、凝灰岩と安山岩で構成される。

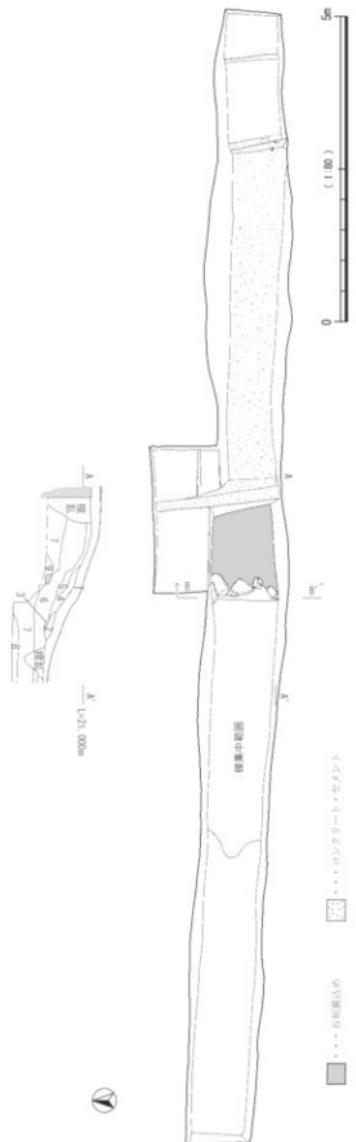
なお、近代の造成土中と導水路埋土から瓦が出土している。

## オ 7トレンチ（第31図）

8トレンチの西側、8・11トレンチと同じ平坦面に、導水路がないか探るためにトレンチを設定した。

調査の結果、標高22.50m程度で凝灰岩製の導水路の側石を1段検出した。検出された導水路側石の南側は、凝灰岩の礫を含む裏込めも確認できる。北側の側石及び床石は消失しており、導水路の幅等は不明である。おそらく、近代の造成時に消失したものと推測される。

なお、表土、近・現代の水田闊連層、近代の造成土中から瓦と磁器が出土している。瓦は、被熱を受けているものが多い。



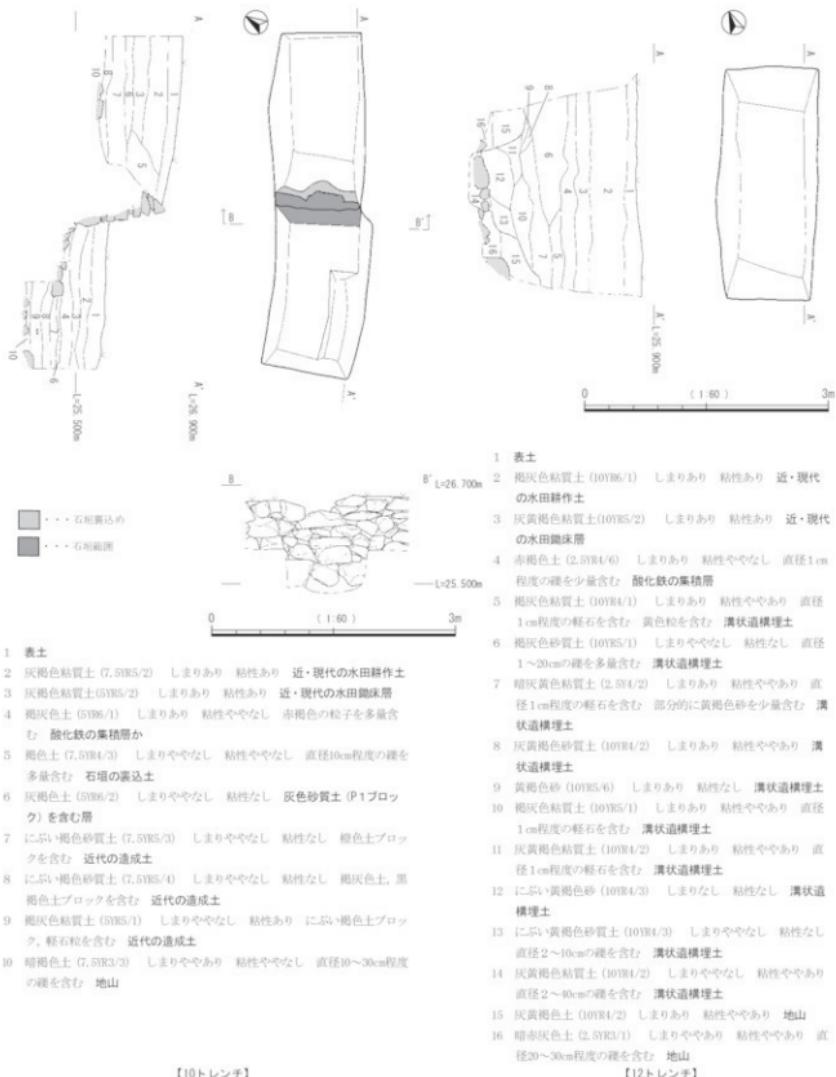
- 表土  
1 剥離色土 (10YR 4/0) しまりなし。粘性ややなし。耕作放棄後の洗入土  
2 剥離色土 (10YR 4/1) しまりなし。粘性ややなし。耕作放棄後の洗入土  
3 水田耕 (10YR 4/1) しまりなし。粘性なし。耕作なし。  
4 剥離色土 (10YR 2/0) しまりなし。粘性ややなし。耕作放棄後の洗入土  
5 剥離色粘質土 (10YR 4/4) しまりなし。粘性なし。耕作放棄後  
6 剥離色粘質土 (10YR 6/1) しまりあり。粘性あり。耕作放棄後の洗入土  
7 削落剥離色粘質土 (10YR 5/2) しまりなし。粘性ややなし。耕作放棄後の洗入土  
8 剥離色土 (10YR 4/6) しまりあり。粘性ややなし。直径1cm程度の  
9 直径10cm程度の  
10 剥離色粘質土 (17YR 4/3) しまりややなし。直徑10cm程度  
11 剥離色粘質土 (17YR 4/3) しまりややなし。直徑10cm程度  
12 石塊の露込土  
13 石塊の露込土

第24図 敷根火薬製造所跡2トレンチ実測図



第25図 敷根火薬製造所跡2トレンチ検出石垣実測図

第26図 敷根火薬製造所跡2トレンチ周辺古写真(昭和63年頃)  
(たいら郷土館)



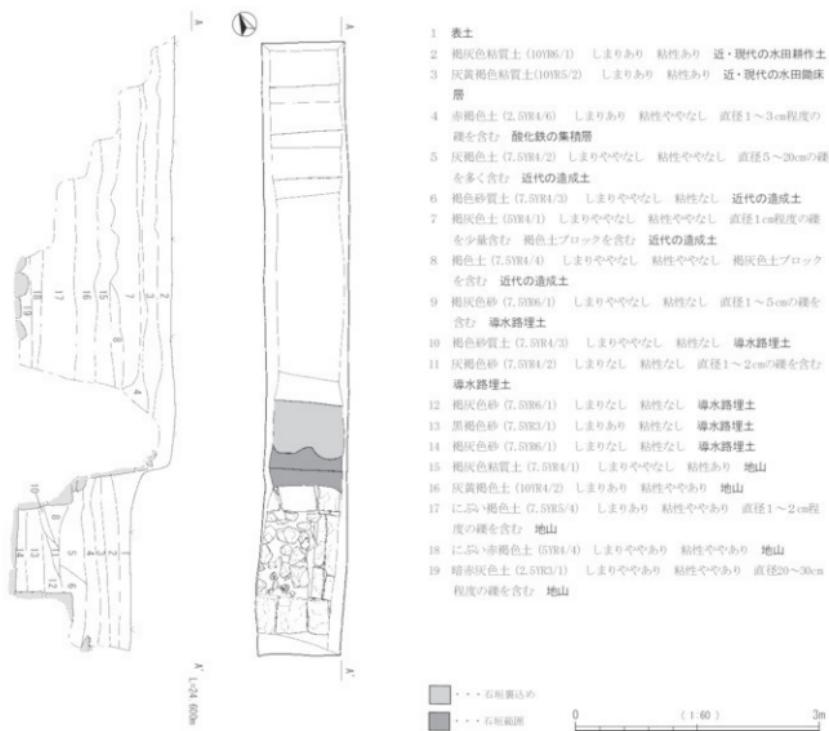
【10トレンチ】

【12トレンチ】

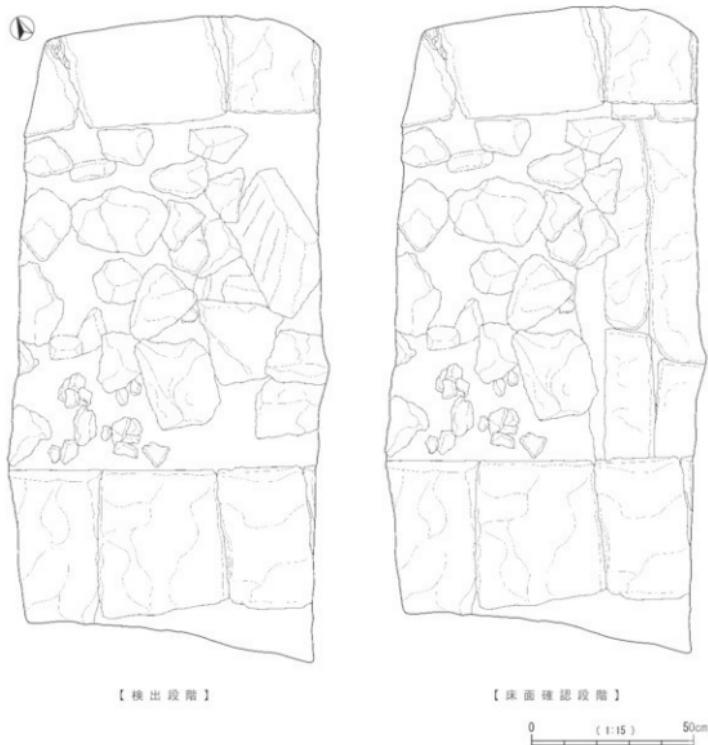
第27図 敷根火薬製造所跡10・12トレンチ実測図



第28図 敷根火薬製造所跡11トレングチ実測図



第29図 敷根火薬製造所跡8トレングチ実測図



第30図 敷根火薬製造所跡8トレンチ検出導水路実測図

#### (4) その他の地点の調査（6・9トレンチ）

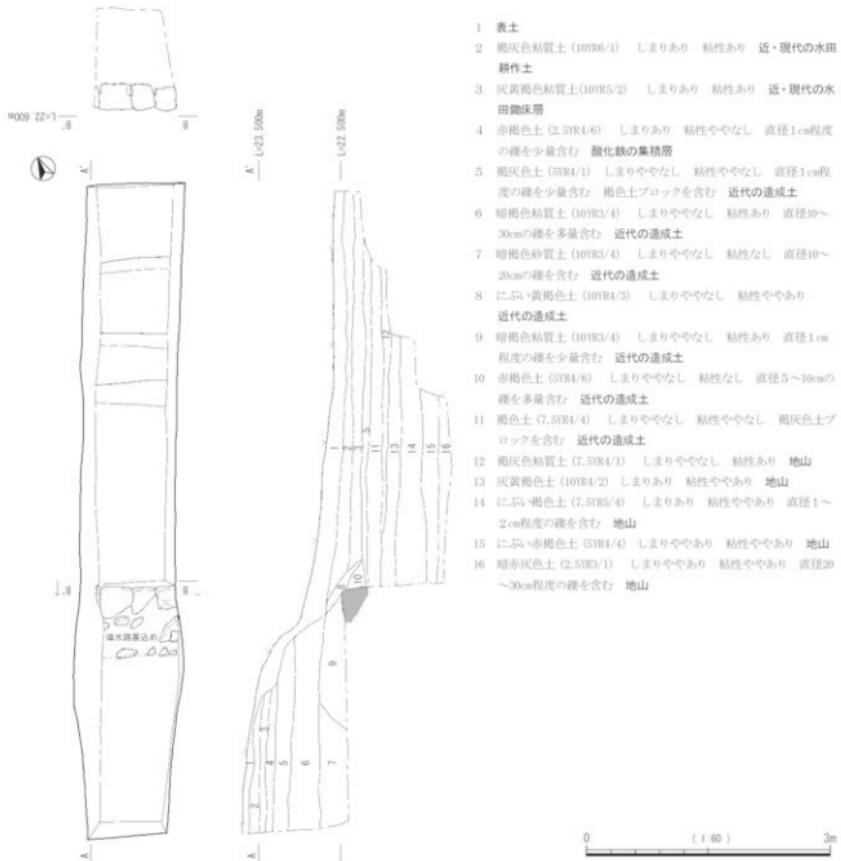
その他、上記以外の目的で設定したトレンチをまとめて詳述する。

##### ア 6トレンチ（第32図）

7トレンチの西側、7・8・11トレンチより1段低い平坦地に地表面上で確認できる石垣に接する形でトレンチを設定した。6トレンチの南側には、現在も水田への用水路と使用されている導水路がある。しかし、6トレンチ付近で、凝灰岩製からコンクリート製へ改修されて

いる。そのため、本来の水路の続きがないか探ることが、本トレンチを設定した目的である。

調査の結果、導水路やその痕跡を確認することができなかった。しかし、地表面上で確認できる石垣をさらに掘り下げ、根石まで検出したところ、北側と南側では、積み方や根石のレベルが異なり、北側の石垣を切る形で南側の石垣を積み上げていることが分かった。あくまで推測の域はでないが、本来は南側の石垣部分に導水路があり、導水路をコンクリート製へ改修する際、水路の向



第31図 敷根火薬製造所跡 7トレンチ実測図

きも変え、不要になった本来の導水路部分を石垣へ改修したのではないだろうか。

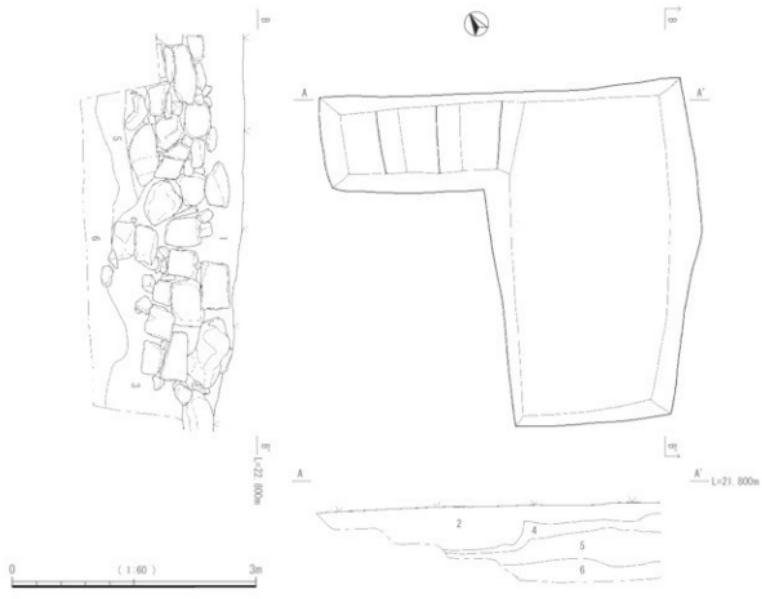
なお、表土及び近・現代の水田間連層から瓦が出土している。

#### イ 9トレンチ（第33図）

7トレンチの東側、8トレンチの西側で7・8・11トレンチより1段低い平坦面にトレンチを設定した。現在、地表面上では石垣等は確認できないため、本来石垣があったかどうか探ることを調査の目的とした。

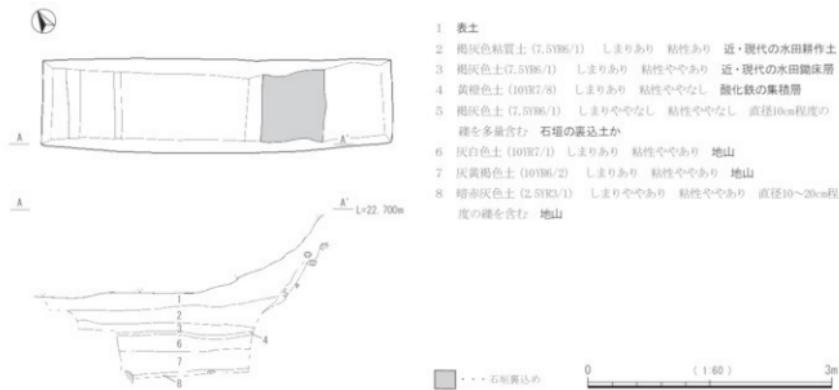
調査の結果、石垣そのものは残存していなかったが、

石垣の裏込土と考えられる礫を多量含む層を検出した。ただし、元来あったと想定される石垣が、火薬製造時のものか、近・現代の水田に伴うものは不明である。



- 1 表土  
 2 現代の客土・造成土・埋立土  
 3 灰褐色土 (10YR4/2) しまりややなし 粘性ややなし 直径1~3cm  
 の縫を多量含む 現代の水路改修時の埋土
- 4 暗灰色粘土 (10YR6/1) しまりあり 粘性あり 近・現代の水田耕作土  
 5 暗黄褐色粘土 (10YR5/2) しまりあり 粘性あり 近・現代の水田耕作土  
 6 暗灰色粘土 (7.5YR4/1) しまりややなし 粘性あり 地山

第32図 敷根火薬製造所跡6 トレチ実測図



第33図 敷根火薬製造所跡9 トレチ実測図

### 3 出土遺物について

今回の調査では、火薬製造時に時期的に近い遺物として、瓦や陶磁器が出土した。遺物の出土は調査対象範囲の南側（6・7・8・11・12トレンチ）に限られる。その他、持ち帰ってはいないが、石臼が1トレンチで出土している。以下、トレンチ毎に詳述する。

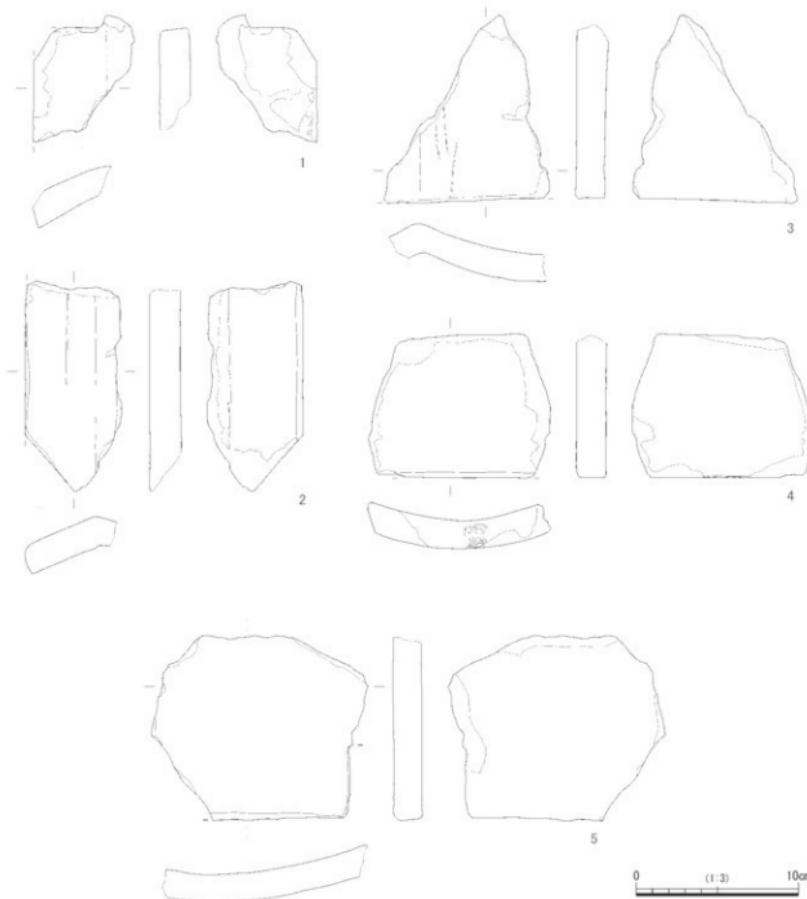
#### (1) 6トレンチ出土遺物（第34図）

6トレンチでは、11点瓦が出土した。うち、5点を図化した。1～5は棟瓦である。1には棟部の、5には平

部の切込が見られる。4には端部中央に「小窓」の刻印が押されている。

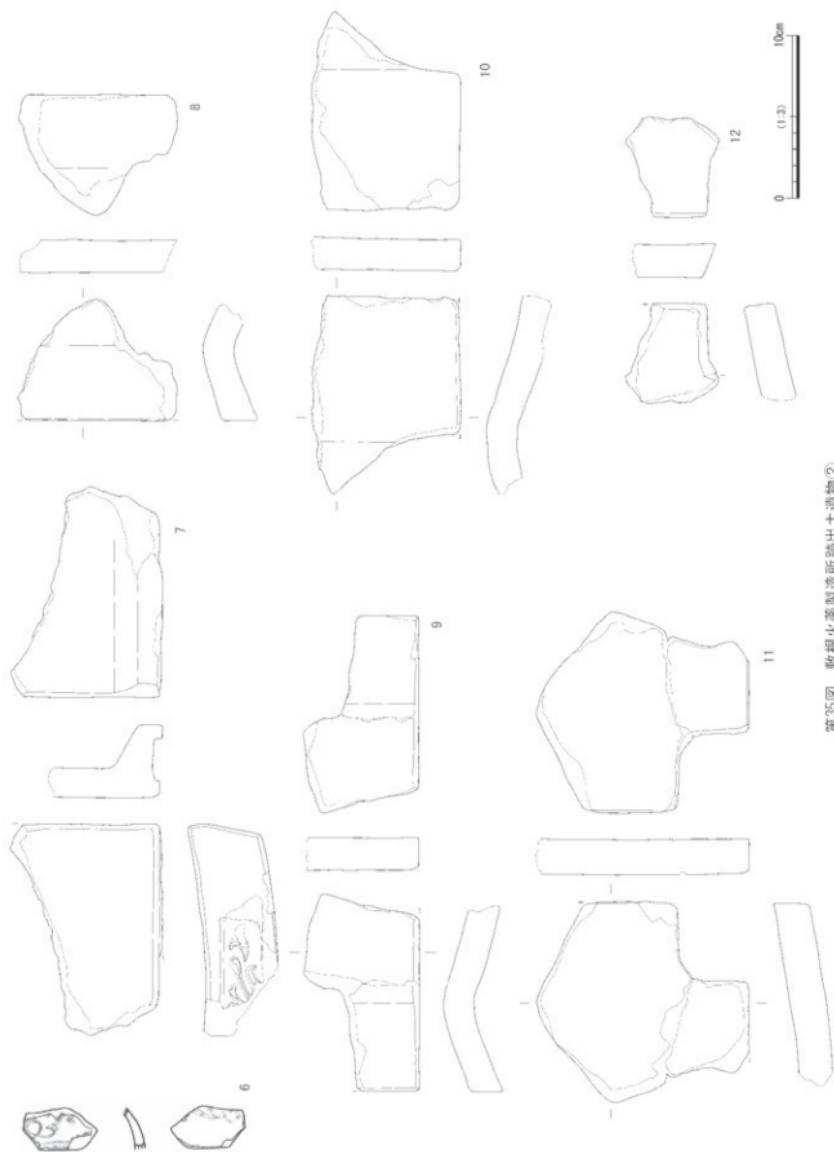
#### (2) 7トレンチ出土遺物（第35～37図）

7トレンチでは、40点の瓦と1点の磁器が出土した。7トレンチでは、被熱を受けた瓦が多数出土している。被熱を受けている瓦の割合は、約6割にのぼる。15点の瓦と1点の磁器を図化した。6は肥前系磁器皿である。内外面に文様が描かれている。7は軒桟瓦である。軒平部には唐草文が描かれている。8～21は棟瓦である。

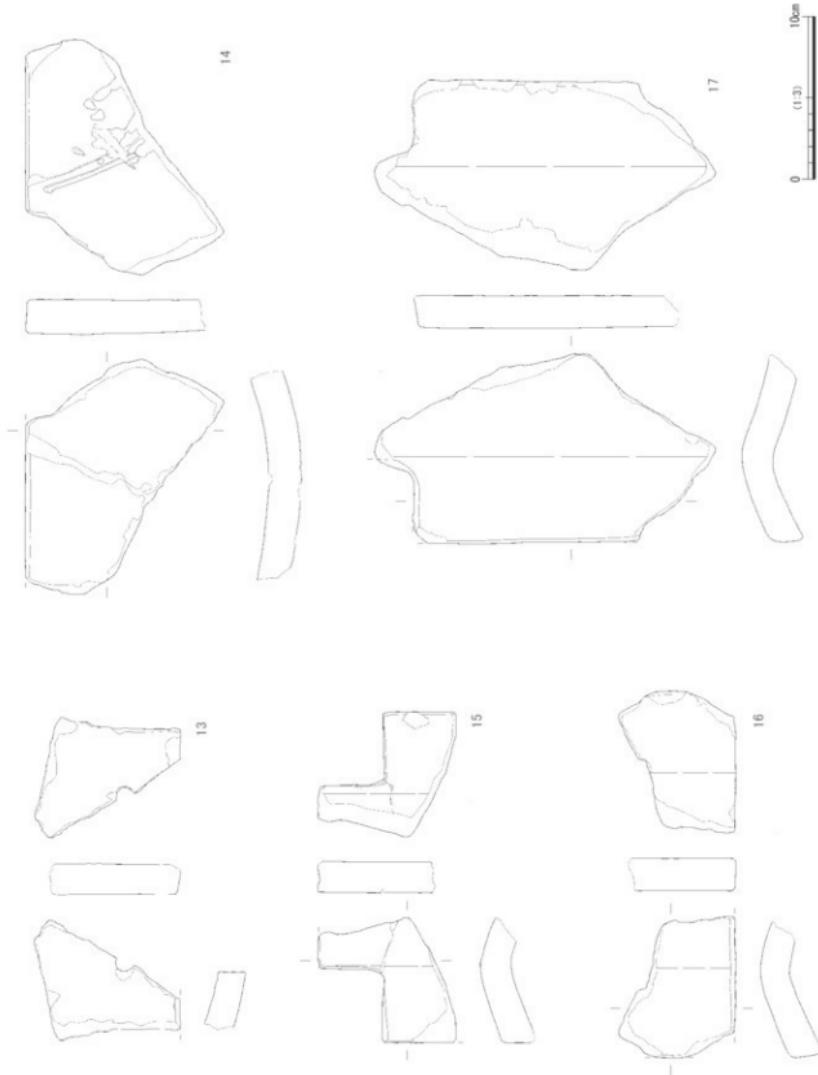


第34図 敷根火薬製造所跡出土遺物①

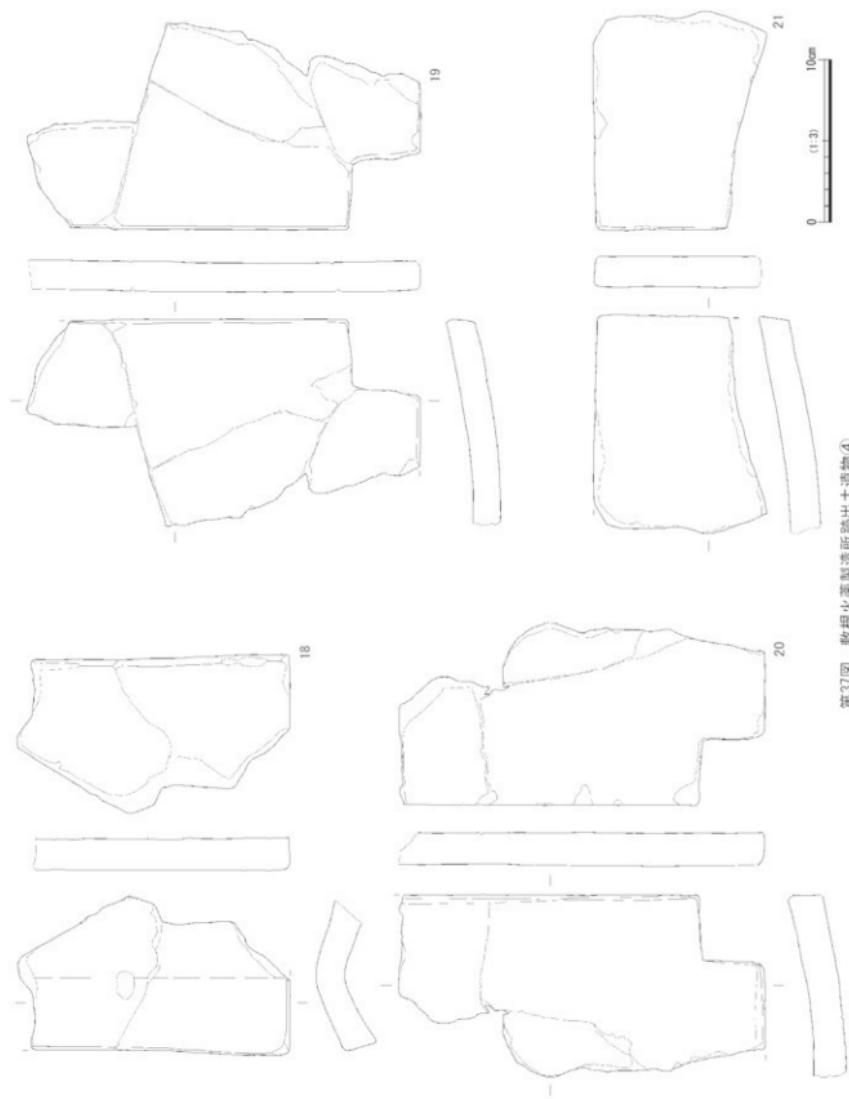
第35圖 欽根火藥製造所出土遺物(2)

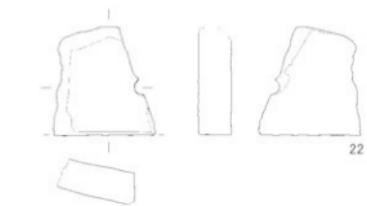


第36圖 敷根火藥製造所跡出土遺物(3)



第37圖 故根火藥製造所出土遺物(4)





15・17には稜部。11・12・19・20には平部の切込が見られる。13には孔が穿たれている。14は、刻書があるが文字は不明である。15～21は被熱を受けている。

### (3) 8トレンチ出土遺物 (第38・39図)

8トレンチでは、近代の造成土中から7点、導水路埋土から6点の瓦が出土している。うち、5点の瓦を図化した。22～26は棟瓦である。22には孔が穿たれている。26には平部の切込が見られる。

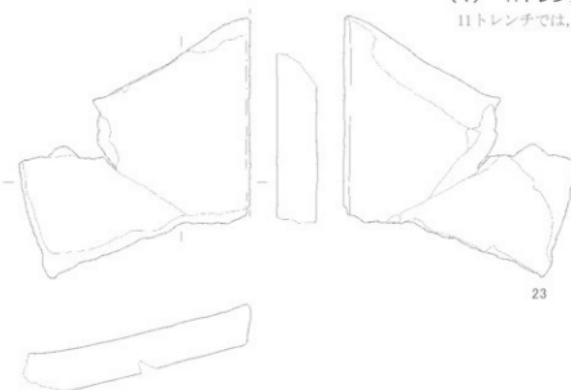
### (4) 11トレンチ出土遺物及び関連遺物 (第39図)

11トレンチでは、27点の瓦と1点の陶器が出土した。

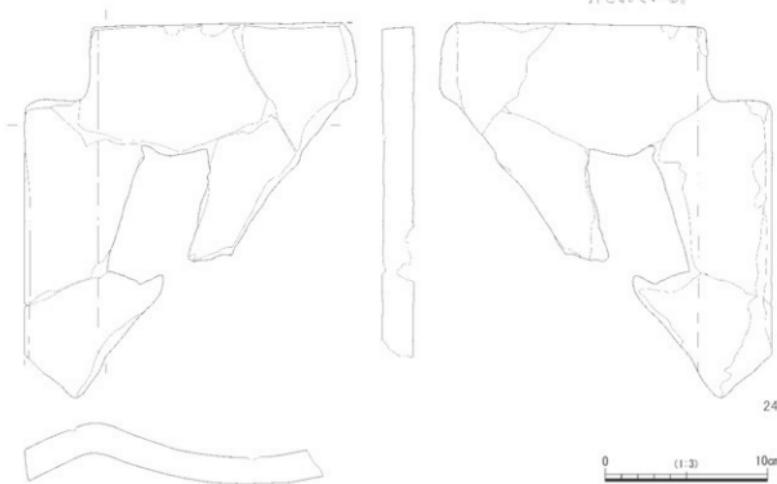
うち、瓦3点、陶器1点を図化した。27は苗代川産陶器甕の胴部である。28は表採品ではあるが、27と同一個体の口縁部と思われるため、あわせて報告する。29は袖樋瓦である。30・31は棟瓦である。

### (5) 12トレンチ出土遺物 (第40図)

12トレンチでは、溝状遺構埋土中から6点の瓦が出土した。うち、3点を図化した。32～34は棟瓦である。32には稜部の切込が見られる。34には端部中央にS字状の刻印が押されている。



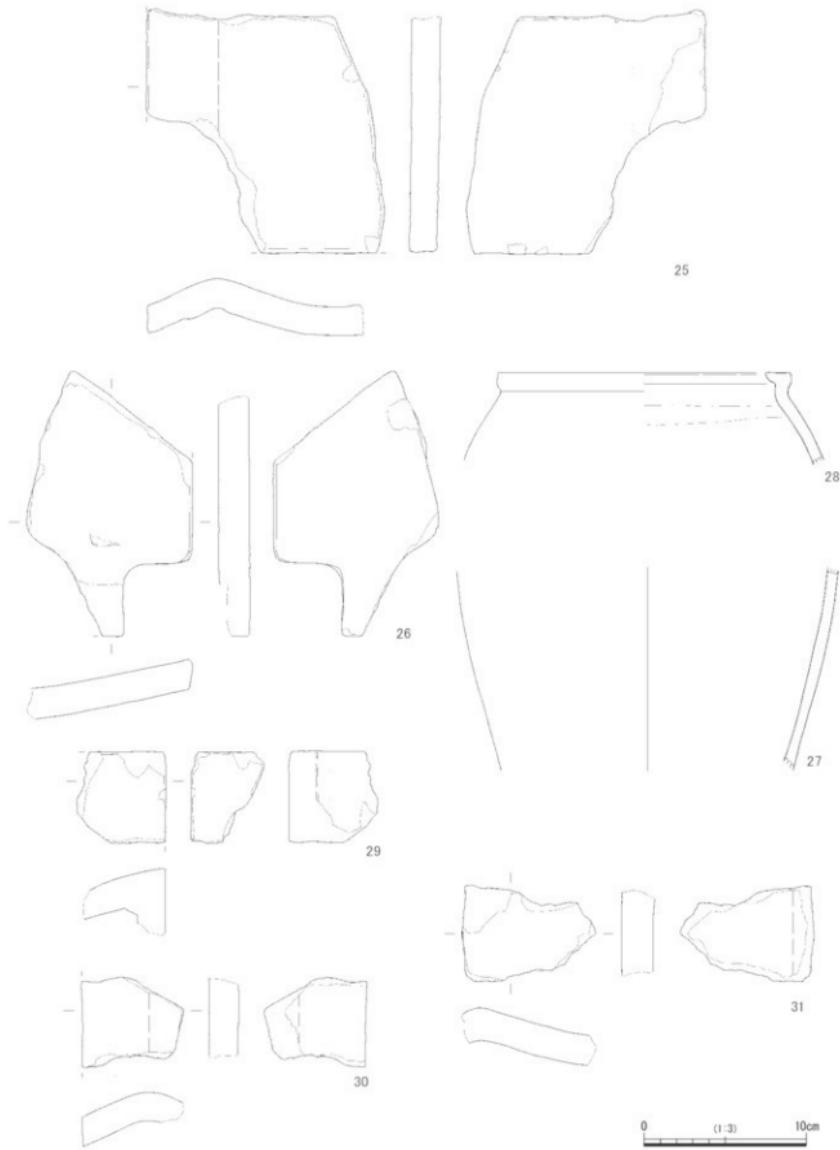
23



24

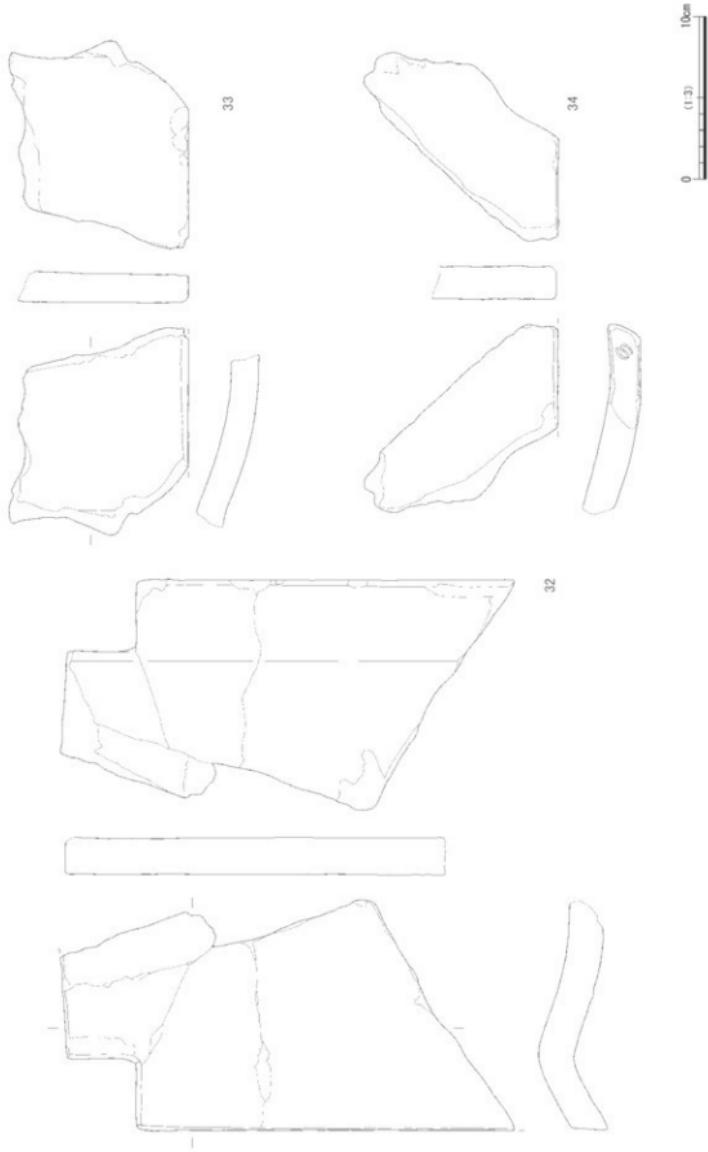
0 (1:3) 10cm

第38図 敷根火薬製造所跡出土遺物⑤



第39図 敷根火薬製造所跡出土遺物⑥

第40圖 敷根火藥製造所跡出土遺物⑦



### (7) 石臼について (第41~43図・第5表)

1トレンチで挽臼の下臼となる石臼が出土したほか、1トレンチ南西の導水路上の地表面（第41図）及び同導水路内（第42図）で挽臼の上臼となる石臼を計2点確認した。そのほか、敷根東集会所横の宅地内に敷根火薬製造所跡出土とされる石臼（挽臼）が6点保管されている。そのうち、4点を借用し、写真撮影を行った（第43図）。いずれも、挽臼である。石材は輝石安山岩である（図1）。直径は58~72cm程度、厚さは15~27cm程度である。摺面



第41図 敷根火薬製造所跡水路上地表面石臼



第42図 敷根火薬製造所跡水路内石臼

には溝が掘られている。区画は6区画のものと8区画のものが見られる。上臼の側面には柄孔があり、5個のものと20個以上あるものに分かれる。

このほか、敷根集落内の個人宅で、敷根火薬製造所跡出土とされる石臼（挽臼）の存在も確認している。

#### 【註釈】

1 萩原島大学大木公彦名誉教授のご教示による。



第43図 敷根火薬製造所跡個人蔵石臼

第5表 敷根火薬製造所跡出土石臼観察表

所在場所	器種	石材	残存状況	法量(跡測)			櫛面溝 の本数		輪孔		モノクバリ孔		側孔		備考
				直径(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	形状	法量(cm)	法量(cm)	形状	個数	法量(cm)	形状	個数	
LT	下臼	輝石安山岩	完形	65	16	未計測	不明	不明	—	なし	—	なし	—	—	櫛面が下を向いた状態で出土したため一部計測不能
水路上地表面	上臼	輝石安山岩	一部欠損	58	24	未計測	60×6本	方形	10×11	方形	9×9	方形	24	4×4	埋没箇所があるため一部計測不能
水路内	上臼	輝石安山岩	一部欠損	不明	26	未計測	不明	不明	—	不明	—	方形	不明	5×5	埋没箇所があるため一部計測不能
個人蔵	上臼	輝石安山岩	完形	72	15	160	60×7本	方形	10×10	方形	10×10	方形	3	4.5×4.5	第40回写真手帳
個人蔵	上臼	輝石安山岩	完形	72	23	230	60×9本	方形	10×9	不明	—	方形	5	6×4	第40回写真中央 —添シタリートによる改良
個人蔵	上臼	輝石安山岩	完形	70	23	190	60×6本	方形	10×10	方形	12×9	方形	22	4×4	第40回写真上段
個人蔵	下臼	輝石安山岩	完形	67	27	240	60×6本	方形	9×9	なし	—	なし	—	—	第40回写真奥下段
個人蔵	上臼	輝石安山岩	完形	67	26	未計測	60×6本	方形	10×10	方形	11×8	方形	22	4×4	
個人蔵	上臼	輝石安山岩	完形	73	17	未計測	60×8本	方形	10×10	方形	10×10	方形	24	5×5	

第6表 敷根火薬製造所跡出土瓦観察表

種別 番号	横載 番号	取上 番号	出土 トレンチ	層位 遺構名	器種	法量(cm)			色調		備考
						最大長	最大幅	最大厚	表面	裏面	
34	1	一括	6T	表土	桟瓦	(7.6)	(6.2)	2.0	暗灰(N3/1)	灰(N5/1)	
	2	一括	6T	表土	桟瓦	(12.9)	(5.9)	3.9	灰白(25G18/1)	灰(N4/1)	
	3	一括	6T	近現代水田層	桟瓦	(11.5)	(10.2)	1.9	暗灰(N3/1)	灰(N4/1)	
	4	一括	6T	近現代水田層	桟瓦	(8.8)	(11.2)	1.9	灰(N4/1)	灰(N5/1)	「小頭」の墨あり
	5	一括	6T	表土	桟瓦	(11.3)	(13.3)	1.8	灰(N4/1)	暗灰(N3/1)	
35	7	一括	7,10T	近代造成土	軒桟瓦	(9.3)	(12.9)	4.5	灰(N4/1)	灰(N4/1)	
	8	一括	7T	表土+ 近現代水田層	桟瓦	(9.7)	(7.4)	2.2	灰(N4/1)	灰(N5/1)	
	9	一括	7T	近代造成土	桟瓦	(7.4)	(12.1)	2.0	灰(N4/1)	灰(N5/1)	
	10	一括	7T	近現代水田層	桟瓦	(9.1)	(12.1)	2.1	灰(N4/1)	灰(5W1/1)	
	11	一括	7T	近代造成土	桟瓦	(13.0)	(12.3)	2.2	灰(N5/1)	灰(N5/1)	
	12	一括	7,10T	近代造成土	桟瓦	(5.8)	(6.2)	2.0	灰(N4/1)	灰(N5/1)	
36	13	一括	7,10T	近代造成土	桟瓦	(9.0)	(7.4)	1.8	灰(N4/1)	暗灰(N3/1)	穿孔あり
	14	一括	7,10T	近代造成土	桟瓦	(12.2)	(14.4)	2.1	灰(N4/1)	灰(N4/1)	削痕?あり
	15	一括	7T	近代造成土	桟瓦	(8.5)	(7.6)	2.1	浅黄(2.5W8/3)	浅黄(2.5W8/3)	被熱あり
	16	一括	7T	近代造成土	桟瓦	(7.2)	(8.7)	2.1	浅黄(2.5W8/3)	浅黄(2.5W7/2)	被熱あり
	17	一括	7T	表土+ 近現代水田層	桟瓦	(20.9)	(11.6)	2.1	浅黃褐(10W8/4)	浅黃褐(10W8/4)	被熱あり
	18	一括	7T	近代造成土	桟瓦	(16.7)	(9.7)	2.2	浅黃褐(10W8/2)	浅黃褐(10W8/4)	被熱あり
37	19	一括	7T	近代造成土	桟瓦	(24.1)	(12.6)	1.8	灰白(2.5W8/2)	浅黃褐(10W8/4)	被熱あり
	20	一括	7T	近代造成土	桟瓦	(22.5)	(11.1)	2.2	浅黃褐(10W8/4)	浅黃褐(10W8/3)	被熱あり
	21	一括	7T	近代造成土	桟瓦	(10.7)	(13.4)	1.9	浅黃褐(10W8/3)	灰白(10W8/2)	被熱あり
	22	一括	8T	近代造成土	桟瓦	(6.6)	(6.2)	2.0	灰(N4/1)	灰(7.5W6/1)	穿孔あり
38	23	一括	8T	近代造成土	桟瓦	(15.9)	(14.1)	2.5	灰(7.5W6/1)	灰(N6/1)	
	24	一括	8T	導水路底土	桟瓦	(23.0)	(20.3)	1.9	暗灰(N3/1)	暗灰(N3/1)	
	25	一括	8T	導水路底土	桟瓦	(15.0)	(14.6)	1.9	灰(N5/1)	灰(N4/1)	
39	26	一括	8T	導水路底土	桟瓦	(16.2)	(10.2)	3.9	暗灰(N3/1)	暗灰(N4/1)	
	29	一括	11T	近代造成土	袖桟瓦	(5.6)	(5.5)	4.1	灰(N4/1)	灰(N5/1)	
	30	一括	11T	近代造成土	桟瓦	(5.6)	(6.2)	1.9	灰(10W5/1)	灰(7.5W6/1)	
	31	一括	11T	近代造成土	桟瓦	(5.9)	(8.2)	2.0	灰白(5W7/2)	灰白(5W7/2)	
40	32	一括	12T	溝埋土	桟瓦	(27.3)	(14.6)	2.3	灰(N4/1)	灰(N4/1)	
	33	一括	12T	溝埋土	桟瓦	(11.0)	(12.7)	1.9	暗灰(N3/1)	灰白(7.5W7/2)	
	34	一括	12T	溝埋土	桟瓦	(11.9)	(11.6)	2.1	灰(N4/1)	灰白(5W7/2)	「S」字状の鉛あり

第7表 敷根火薬製造所跡出土陶磁器観察表

種別 番号	横載 番号	取上 番号	出土 トレンチ	層位	種別	器種	産地	法量(cm)			胎土の 色調	施釉部位	備考
								口径	底径	器高			
35	6	板	7T	近代造成土	染付	皿	肥前系	-	-	-	灰白	残存部全周	
39	27	一括	11T	近代造成土+ 近現代水田層	陶器	甕	苗代田	-	-	-	灰褐	残存部全周	
	28	一括	11T	近代造成土+ 近現代水田層	陶器	甕	苗代田	(9.6)	-	-	灰褐	口縁部上面・胴部上辺の一部釉剥げ	

## 第5節 小結

第4節調査成果をもとに、敷根火薬製造所跡の構造についてまとめていきたい。

### 1 建物跡について

建物跡の可能性が考えられるのは、1トレンチで検出した礎石1か所のみである。昭和63(1988)年の鹿児島県立国分高等学校郷土研究クラブの調査では、3か所で礎石を確認しているが、うち1か所を再確認したことになる。1トレンチ付近は、『薩藩海軍史』によると水車をもつ「火薬搗所」があった場所である(第10図)。この「火薬搗所」は、明治6(1863)年の「火薬杵臼水車」、明治10(1867)年の「火薬調合所」(第4表)にあたると思われる。規模は1棟6坪である。建物全体の検出を行っていないため、文献との比較はできなかった。

なお、1トレンチ及びその周辺では挽臼3点を確認しており、挽臼を用いた火薬調合を行っていたことが窺える。「火薬搗所」や「火薬杵臼水車」に表れる杵を用いた突臼の存在は確認できなかった。また、史料では「火薬杵臼水車」「火薬調合所」が小ヶラ葺であるが、1トレンチで瓦が出土しなかったことと照合する。

### 2 導水路跡について

現在も田んぼへの用水路として使用されている西側の導水路と東側の一部埋没している導水路跡に加え、その間に完全に埋没していた導水路跡を新たに見出した。8・11トレンチではこの導水路跡の規模の把握が可能である。幅約1.0~1.1mであった。西側の水車が設置されていたと考えられる導水路幅が約1.2mである。また、12トレンチ付近の平坦面と8・11トレンチ付近の平坦面で高低差があることとあわせて考えると、8・11トレンチで検出された導水路に水車が設置されていた可能性が想定される。なお、3b・cトレンチで検出した導水路跡の幅は約50cmであり、ここに水車を設置したとは考えにくい。導水路跡は、いずれも凝灰岩製の切石を布積みしている。

このほか、礎集中範囲(溝状構造)を2・4・5・12トレンチで検出した。遺構の性格としては、凝灰岩製の導水路を抜き取った痕ではないかと考えられる。

なお、3d~gトレンチで検出した導水路跡は、床面のレベルやセメントによる補修痕から近代以降の所産と考えられる。おそらく近代以降に田畠となった際、水が田畠に流れ込まないよう改修したのであろう。

### 3 通路跡について

昭和61(1986)年、鉄砲氏研究家の川越重昌氏が実路調査を行った際、一部ボーリング棒で地下構造を探った結果、水路に沿って幅約2.0mの石敷道路があつたのではないかと推定している。今回の調査で石敷道路は確認

できなかつたが、3bトレンチで幅約1.6mの硬化面を導水路に沿つて検出した。遺構の性格としては、道跡と想定される。おそらく、川越氏はこの硬化面等を石敷道路と認証したのであろう。

### 4 石垣について

今回の調査で、安山岩と凝灰岩を野面積みした石垣を多数検出した(1・2・4・6・8・10・11トレンチ)。これらの石垣は、礎石や導水路跡や大正3(1914)年の桜島大正火山であるP1を含む層の上に構築されており、近代以降の所産と考えられる。現在、地表面上で確認される安山岩と凝灰岩を野面積みした石垣も近代以降の所産と考えるのが妥当だろう。

一方、4トレンチ南側の石垣の根石部分や前述の導水路跡部分は凝灰岩の切石を布積みしており、このような石垣が火薬製造所時の石垣の姿を留めているものと思われる。凝灰岩の切石を布積みした石垣は、敷根火薬製造所入口と想定される石垣(第15図Ⅷ)で確認できる。

なお、安山岩・凝灰岩とともに、近辺で採取可能な石材である。

### 5 トルビン水車跡について

敷根火薬製造所には、当時最新鋭のトルビン水車が設置されていた可能性が指摘されている。設置されたトルビン水車は幕末~明治期の紡績技術者である石河正龍が発案し、水車や水路、水車を収める建物を初期洋風建築を手がけたウォートルスが設計したことが史料に残っている。

川越氏がトルビン水車を設置した場所と想定した付近(4トレンチ)を面的に調査したが、その痕跡を確認することはできなかつた。

### 6 出土遺物について

調査対象範囲の南側、特に7・11トレンチで多数の瓦が出土した。なお、この付近は『薩藩海軍史』によると水車をもつ「硫黄搗」があった場所である(第10図)。この「硫黄搗」は、明治6(1863)年の「硫黄硝石搗水車」、明治10(1867)年の「硫黄硝石搗小屋」(第4表)にあたる。これは史料上瓦葺の建物であり、明治10(1867)年に焼失したとある。今回の調査で焼けた瓦が多数出土したこととも照合する。

なお、出土した瓦は、軒瓦の瓦当文様や瓦の切込部の規格から大阪系の技術系譜にある瓦と思われる。

このほか、18世紀後半~19世紀の所産である陶磁器が数点出土した。

# 根占原台場跡

## 第IV章 根占原台場跡

### 第1節 遺跡の位置と環境

#### 1 地理的環境（第44図）

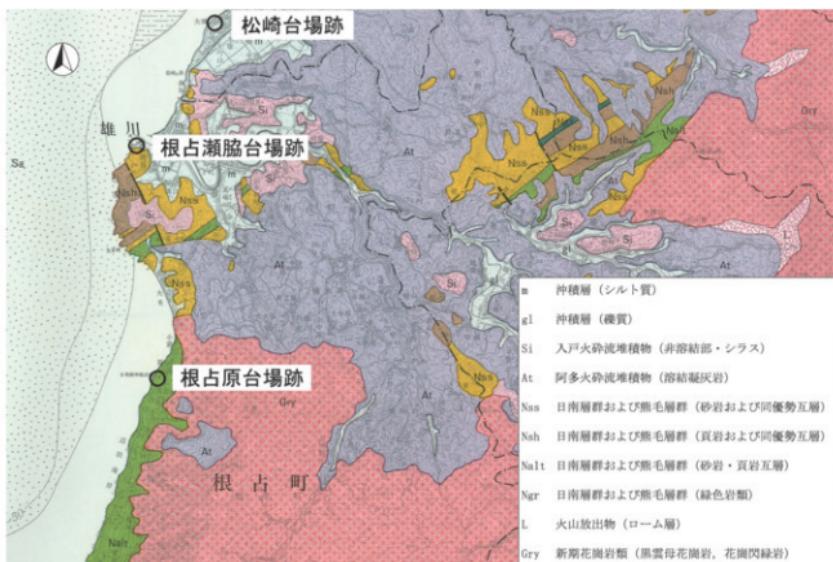
根占原台場跡は鹿児島県肝属郡南大隅町根占辺田に所在する。遺跡の所在する南大隅町は、面積が213km<sup>2</sup>で、大隅半島の南端に位置し、北西部が本県錦江町、北東部が本県肝付町と接し、対岸薩摩半島の指宿市に相対する。平成17（2005）年に、根占町と佐多町の2町が合併して誕生した。

本遺跡の所在する旧根占町域は、北東部から南東部に広がるの中別府・横別府台地帯と台地をなすて流れる雄川によって形成された沖積平野帯、阿多カルデラの東壁が海に落ち込んで山地が迫る大浜・辺田の海岸地帯の大きく3地域に分けられる。

雄川は、旧内之浦町（肝付町）と旧田代町（錦江町）の境にある六郎館岳に源を発し、旧田代町と旧根占町の境界で崖面を下落して豪壮な雄川滝を形づくり、塩入付近で鹿児島湾に注ぐ。総延長約24kmである。流域の大部分が深成岩類や日南層群に代表される堆積岩の分布域であり、県内一般に見られるシラス台地を刻む河川と流れを異にしているという特徴がある。また、雄川は小

川内付近から低地にでると蛇行し、両側に肥沃な沖積地をつくる。この一帯が根占の中心地として古代・中世から発達した地域である。標高200~300mの中別府・横別府台地は火山灰台地となっており、この台地上に発達した集落も存在する。台地の南側には、辻岳・野首岳を主峰とする辻岳山塊が南西に延びている。大浜・辺田の海岸地帯には、花崗岩の大塊が海岸一帯に累々として重なり約12kmの間を埋めている。この大浜・辺田海岸一帯は、霧島錦江湾国立公園に属しており、雄大な景観を有する。また、旧根占町域の西側は錦江湾に面しており、さらにその奥では開聞岳の秀麗な姿を展望できる。

根占原台場跡は、標高約5~10mの辺田の海岸地帯に位置する。遺跡の西側には、黒雲母花崗岩や花崗閃綠岩により形成された辻岳山塊から河川等により運ばれたと思われる多数の花崗岩が堆積した海岸が眼前に広がる。辺田は耕地が狭く、背後の山麓に中世からの植栽と伝えられるハゼの老木が茂っている。また、辺田二川にある本土で最初に確認されたヘゴ自生北限地帯は、国天然記念物に指定されている。



## 2 歴史的環境

### (1) 周辺の遺跡（第45図・第8表）

南大隅町根占では67か所が「周知の遺跡」として登録されている。以下に、根占原台場跡周辺の旧根占町域を中心に時代ごとの概要について述べる。

**旧石器時代** 旧石器時代の遺跡は、旧根占町域では発見されていない。

**縄文時代** 草創期の遺跡は発見されていないが、早期になると、横別府の台地上にある大中原遺跡が確認されている。大中原遺跡では、早期前葉～中葉と考えられる堅穴住居状遺構4基、集石遺構29基、集積遺構4基、石器製作跡1か所が確認されている。土器は、吉田式土器が主体で、このほか少量ながらの前平式土器や小牧3Aタイプ土器、石板式土器、下剥峯式土器などが出土している。

前期～中期の遺跡は、並追遺跡や東馬渡遺跡で確認されている。森式土器や曾畠式土器・春日式土器が出土しているが、いずれの遺跡もトレンチ調査であり、遺跡全体の様相は不明である。

後期は、指宿式土器・市来式土器・岩崎式土器が出土した前田遺跡や丸尾式土器が出土した東馬渡遺跡が確認されている。晚期になると貫見原遺跡や出口遺跡、並追遺跡、茂谷遺跡、馬渡遺跡、上原遺跡など確認されており遺跡数が増加する。これらの遺跡では、黒川式土器や刻目突蒂文土器が出土している。特に、出口遺跡では、丹塗磨研壺が確認されていることが注目される。

**弥生時代** 前期の遺跡としては、高橋式土器が出土した貫見原遺跡が挙げられる。中期の遺跡としては、貫見原遺跡や谷添遺跡、出口遺跡、野首遺跡が確認されている。谷添遺跡で確認された1号堅穴住居跡は、山ノ口I式土器の時期の住居であるが、住居廃絶後、磨製石織製作場として再利用され、その後開闢岳の噴出物である暗紫コラが堆積しているという状況が注目される。

**古墳時代** 古墳時代の遺跡としては、成川式土器が出土した貫見原遺跡や千束遺跡が挙げられる。特に千束遺跡は高地性集落として著名であり、2基の堅穴住居跡が確認されている。また、多量の土器片に加え、鐵鑄等の鉄製品も出土している。

**古代** 当地域は平安期の「和名抄」に見える大隅郡禰復（禰寢？）郷に属し、11世紀半ばの郡郷制解体後は禰寢院と呼ばれるようになる。この禰寢院を開発して、大隅半島南部に大勢力を築いたのが禰寢氏である。禰寢氏の遠祖と思われる藤原賴光は、治歎5（1069）年に禰寢院内の所領を諸子に分配している。そのころの禰寢院は北俣（大禰寢院）と南俣（小禰寢院）に二分されており、旧根占町域は、禰寢院南俣の北部に比定される。

発掘調査の成果としては、土器や須恵器が出土した淹見遺跡や茂谷遺跡が知られるが、大隅半島南部で確認

されている古代の遺跡は概して少ない。

**中世** 鎌倉幕府成立後、禰寢氏は建部性を称し、大隅国のお守官人、郡司（院司）で、姻戚の菱刈氏と競合しながら勢力を拡大していく。同氏の勢力基盤は禰寢院南俣にあり、鎌倉幕府滅亡後も建武新政府からこの本領を安堵されている。足利尊氏が建武新政府に反すると、尊氏の将、畠山直顥に従って、宮方の肝付氏に対抗した。親応の擾乱にあたり、足利氏が分裂すると、禰寢一族は、九州に向した足利直冬配下の畠山直顥の指揮下に入り、島津氏久や肝付兼重らの宮方連合軍と対峙した。しかし、元中2（1385）年に禰寢氏は宮方に降り、島津連營に加わった。なお、旧根占町域には、禰寢氏の本城である富田城や天正年間伊東・肝付両氏により落城させられた瀬脇城の出城水流城、南北朝期山本氏の居城であった山田城などの中世山城跡がある。また、川南の諏訪宇都があり、本県最古の正応6（1293）年・永仁2（1294）年の銘のある板碑や中世からの寺院跡などが残っている。

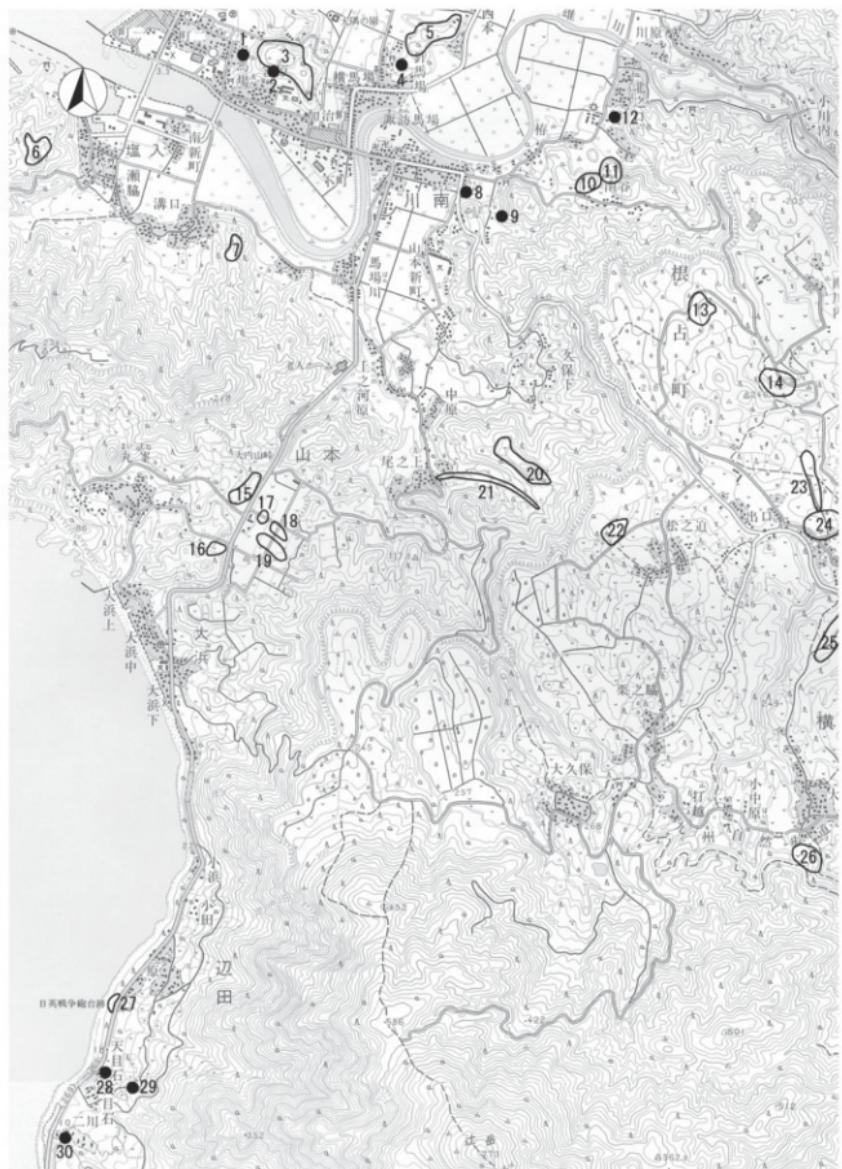
発掘調査の成果としては、御灰塚が挙げられる。須恵質の大型の甕の周辺からは、洪武通宝188枚、水楽通宝2枚、朝鮮通宝4枚のほか鉄片や焼骨が少量出土している。

**近世** 禰寢氏が文禄4（1595）年薩摩吉利郷に移封されたから禰寢院には根占・大根占・田代・佐多と各郷ごとに地頭仮屋を置き、各郷ごとの行政が行われた。旧根占町域は、「天保郷帳」に見える大隅郡小根占郷にあたる。小根占郷は、山本村・辺田村・小根占村の3村からなる。また、雄川の河口に発達した小根占港には江戸期、唐人町があり、南蛮・琉球・中国との海外貿易港として発達した。海外貿易以外に江戸期の産業として注目されるのは、鐵の製造である。辺田の二川や埃屋には製鉄炉跡が残っており、町文化財に指定されている。また、幕末期に設置された台場跡が、今回報告する根占原台場跡のほか、雄川河口近くの瀬脇にもほぼ完全な形で残されている。

発掘調査の成果としては、天目石近世墓が挙げられる。この遺跡では、石塔を標識とし、地下に土壙を持ち、人体を1体埋葬している状況が確認されている。また、副葬品として、「寛永通宝」8枚と蛭石加工品が出土している。

**近・現代** 明治期に入っても小根占港は、対岸の山川港とともに鹿児島湾最大の貿易港として繁栄した。また、明治30（1897）年、南部の大浜には電信局が開局した。大浜と沖縄・台湾間を結ぶ海底線は、日露戦争当時、軍関係の情報を伝えるのに役立っている。

この他、前述の大中原遺跡では、第二次大戦間連の遺物である戦闘機「紫電改」の機銃が出土し、戦争の痛々しさを重く語っている。



第45図 根占原台場跡周辺遺跡位置図(1:25,000)

第8表 根占原台場跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	地形	所 在 地	時 代	主な遺構・遺物	備 考
1	貫見原	丘陵	肝属郡南大隅町横古川 北貫見	縄文（後期）・ 弥生・古墳	貝貝器帶文土器・高橋式・入来式・ 成川式・石斧・石鏟・敲石	『貫見原遺跡』根占町理文報（1）
2	宝藏院跡	台地	肝属郡南大隅町横古川 北宮原	中世		
3	大柄根	台地	肝属郡南大隅町横古川 横別府大柄根	弥生		
4	建部城跡	台地	肝属郡南大隅町横古川 北鉢馬塙	古代		『鹿児島県の中世城館跡』県理文報 (43)
5	山田城跡	台地	肝属郡南大隅町横古川 山本平瀬戸	古代		『鹿児島県の中世城館跡』県理文報 (43)
6	瀬脇城跡	台地	肝属郡南大隅町横古川 山瀬脇	中世		『鹿児島県の中世城館跡』県理文報 (43)
7	水流域跡	台地	肝属郡南大隅町横古川 山瀬口	中世		『鹿児島県の中世城館跡』県理文報 (43)
8	東廟寺跡	平地	肝属郡南大隅町横古川 北浦馬塙	中世		
9	岩林寺跡	台地	肝属郡南大隅町横古川 山瀬坊上	中世		
10	富田城跡	台地	肝属郡南大隅町横古川 山南谷	縄文（後期）・ 中世		『鹿児島県の中世城館跡』県理文報 (43)
11	上ノ山	台地	肝属郡南大隅町横古川 北宮原	弥生		
12	宝屋寺跡	台地	肝属郡南大隅町横古川 南北ノ口	近世		
13	牛牧	台地	肝属郡南大隅町横古川 牛牧	弥生	弥生土器	『根占郷郷土誌』上巻
14	出口	丘陵	肝属郡南大隅町横古川 横別府出口	縄文（後期）・ 弥生・古代	壇状遺構・刻目突弦文土器・入来式・須恵器・石斧・石鏟	『出口遺跡・谷添遺跡』根占町理文報 (5) 『谷添遺跡・出口遺跡』根占町理文報 (10)
15	並道	丘陵	肝属郡南大隅町横古川 山並道	縄文（前・後期）・ 古墳・古代・ 中世・近世	轟式・黒川式・成川式・染付・ 石斧・磨石	『並道遺跡・茂谷遺跡・東馬渡遺跡・ 馬渡遺跡』根占町理文報（2）
16	茂谷	丘陵	肝属郡南大隅町横古川 山本茂谷	縄文（後期）・ 古墳時代・古代・ 中世・近世	黒川式・土師器・須恵器・青磁・ 石斧・磨石	『並道遺跡・茂谷遺跡・東馬渡遺跡・ 馬渡遺跡』根占町理文報（2）
17	南谷坂ノ上	丘陵	肝属郡南大隅町横古川 山南谷			
18	馬渡	丘陵	肝属郡南大隅町横古川 山本馬渡	縄文（後・後期）	黒川式・組織痕土器・剥片	『並道遺跡・茂谷遺跡・東馬渡遺跡・ 馬渡遺跡』根占町理文報（2） 『東馬渡遺跡・馬渡遺跡』根占町理文報 (4)
19	東馬渡	丘陵	肝属郡南大隅町横古川 山本東馬渡	縄文（前・後・ 後期）・古墳・ 古代・中世・ 近世	曾畠式・春日式・丸尾式・黒川式・ 土師器・青磁・白磁・染付・石斧・ 石匙・紙石・敲石・輕石製品	『並道遺跡・茂谷遺跡・東馬渡遺跡・ 馬渡遺跡』根占町理文報（2） 『東馬渡遺跡・馬渡遺跡』根占町理文報 (4)
20	花ノ木	丘陵	肝属郡南大隅町横古川 北花ノ木	弥生	弥生土器	『根占郷郷土誌』上巻
21	大根田	平地	肝属郡錦江町田代 大根田	弥生・中世・ 近世		
22	八重	丘陵	肝属郡南大隅町横古川 横別府八重	古墳		
23	牧ヶ追枝迫頭	丘陵	肝属郡南大隅町横古川 横別府牧ヶ追			
24	大中原	丘陵	肝属郡南大隅町横古川 横別府大中原	縄文（早期）・ 近代	壁穴住居伏造構・集石・築積遺構・ 前平式・吉田式・石瓶式・下削茎式・ 石斧・石鏟・スクレイバー・石皿・ 磨石・帆脚機「紫電改」の機械	『野音遺跡・大中原遺跡』根占町理文報 (7) 『大中原遺跡』根占町理文報(9)
25	花ノ木A	丘陵	肝属郡南大隅町横古川 北花ノ木	弥生・古墳		
26	天目石近世墓	山地	肝属郡南大隅町横古川 天目石	近世	石塔・古錢・輕石加工品	『天目石近世墓』根占町理文報(6)
27	根占原台場跡	海岸	肝属郡南大隅町横古川 辺田原	近世	台場跡・陶器・鉄製品	本報告
28	大道尻	台地	肝属郡錦江町田代 大道尻	古墳		
29	大手越	台地	肝属郡錦江町田代 大手越	縄文（後期）・ 弥生時代		
30	二川の製鉄炉跡	台地	肝属郡南大隅町横古川 二川	近世		

## (2) 根占原台場跡略史

**施設略史** 根占原台場が築かれる前の19世紀初頭の薩摩近海には、モリソン号事件をはじめ西欧諸国の大艦が頻繁に出没し、対外的な緊張が高まっていた。当時藩主であった島津齊興は、これに対応するために天保15・弘化元（1844）年の松山台場（指宿市山川）をはじめとして（公爵島津家編輯所（編）1928b）、指宿・山川・佐多・小根占など各地に台場を築かせた。小根占に築かれた台場は、薩摩藩の中でも初期に築かれた台場の一つで、弘化4（1847）年に完成された。（鹿児島県歴史資料センター（編）1985a）。

弘化5（1848）年には、齊興が小根占郷辺田村海岸の台場に備えている大砲十二斤・七百目的遠撃を視察している（鹿児島県歴史資料センター（編）1985b）。嘉永6（1853）年には、前々年に藩主に就任した島津齊彬が大隅・日向各郷を巡視した際に小根占の台場も巡視したことが、現在の錦江町田代の花瀬自然公園にある大正10（1921）年に建設された記念碑（第46図）に記載されている。（根占郷土誌編さん委員会1974a）。また、この時に島津齊彬が使用した手水鉢が本台場がある台場公園内に残っている（第47図）。文久2（1862）年に生麦事件が起ると、イギリス艦隊の砲撃に備えて、台場の拡幅構築が行われたとされる。その際に築かれたのが現在も残る石垣である。（根占郷土誌編さん委員会1974b）。しかし、明治10（1877）年に西南戦争が勃発すると、政府軍により、鹿児島各所の台場が閉鎖されてしまう。（海軍省185）。ただし、この時に本台場が閉鎖されたか定かではない。

上記のように、文献には当時の郷である「小根占」の台場として書かれていることが多い。また、台場公園内の説明看板によると、旧根占町内には本台場のある辺田に加え、瀬脇と上ノ山の3か所に台場があったとされて

いるが、文献に記載された「小根占」の台場が旧根占町内の台場全てを指しているのか、特定の台場を指しているのか分からぬことが多い。

その後、昭和43（1968）年に本台場は「原の台場跡」として町指定文化財となり、平成2（1990）年には台場公園として整備されている。なお、明治35（1902）年の古地図や戦後の米軍写真によると、現在の国道269号線にあたる道路が確認できる。その後の拡幅工事等は想定されるが、大きな改変等は受けっていないものと思われる（第48図・第49図）。

**研究略史** これまで根占原台場跡の測量調査や発掘調査は行われてない。また、文献史料などによる研究も薩摩藩の台場を研究する中で触れられたことはある（松尾2004、2012aなど）が、本台場に主眼をおいた研究は管見の限り確認できていない。

### 【第IV章第1節 引用・参考文献】

鹿児島県教育委員会（編） 2005 『先史・古代の鹿児島 資料編』  
『角川日本地名大辞典』編纂委員会・竹内理三（編） 1983 『角川日本地名大辞典』46鹿児島県

尚古集成（編） 2015 『薩英戦争150年~前の浜の戦~』

根占郷土誌編さん委員会（編）1974a 『根占郷土誌（上巻）』

根占郷土誌編さん委員会（編）1974b 『根占郷土誌（下巻）』

根占郷土誌復刻版編さん委員会（編）1996 『根占郷土誌復刻改訂版』

松尾千歳 2004 『旧薩摩藩の砲台跡』『鹿児島県の近代化遺産』

松尾千歳 2012a 『薩摩藩の砲台整備事業』『鹿児島筋織路跡・紙園之洲砲台跡・天保山砲台跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（172）

松尾千歳 2012b 『薩摩藩の鉄砲事業に関する一考察』『尚古集成紀要』第11号

※ その他、引用・参考した各報告書は第8表、文献史料は史料一覧参照



第46図 花瀬自然公園内記念碑



第47図 台場公園内手水鉢